

東金市道庭遺跡

— 農業大学校バイテク棟建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

1994

千葉県農林部
財団法人 千葉県文化財センター

とう がね し どう にわ い せき
東 金 市 道 庭 遺 跡

— 農業大学校バイテク棟建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —



1994

千葉県農林部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

下総台地の東縁は、広大な九十九里平野から太平洋をのぞみ、古くから自然環境に恵まれ、数多くの遺跡が分布していることで知られています。

千葉県農林部は、東金市にある農業大学校にバイテク棟の建設を計画しました。この地域は道庭遺跡が知られているところであり、千葉県教育委員会では、同事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、千葉県農林部と慎重に協議を重ねてまいりました。その結果、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講じることになり、発掘調査は、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが担当して、平成4年度に実施いたしました。

このたび、道庭遺跡の整理作業が終了し、報告書を刊行することになりました。発掘調査の結果、弥生時代から奈良・平安時代の集落跡のほか、古墳時代の玉作りの工房跡がみつかり、この地域の原始・古代の人々の生活や文化を解明するうえで、貴重な資料を得ることができます。この報告書が学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるとともに、文化財の保護と普及のために、より多くの方々に活用していただけることを願っております。

おわりにあたり、発掘調査から報告書の刊行にいたるまで、種々ご指導いただいた千葉県教育委員会をはじめ、千葉県農林部、東金市教育委員会、地元関係諸機関のご協力に厚くお礼を申し上げるとともに、発掘調査および整理作業にあたられた調査補助員の皆様に、心から感謝の意を表します。

平成6年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 奥 山 浩

例 言

1. 本書は、東金市家之子字東大宮台1,017-1に所在する、道庭遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、千葉県農林部による農業大学校バイテク棟建設に先立ち、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県農林部との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 調査で使用したコード番号は213-008である。
4. 発掘調査は、平成4年7月1日から平成4年8月31日まで実施した。
5. 現地の調査は、調査部長 天野努、部長補佐 深澤克友、班長 三浦和信の指導のもとに主任技師 土屋潤一郎が担当した。
6. 整理期間は、平成5年4月1日から平成5年6月31日まで実施した。
7. 整理作業および本書の作成作業は、調査研究部長 高木博彦、成田調査事務所長 矢戸三男の指導のもとに調査係長 川島利道が行った。
8. 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、下記諸機関のご指導、ご協力をいただき深く謝意を表する次第です。

千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県農林部農業改良課、千葉県農業大学校、
東金市教育委員会、財団法人山武都市文化財センター

凡　　例

1. 第1図の地形図には国土地理院発行の1:50,000「東金」を使用した。
2. 図版1の航空写真は京葉測量株式会社撮影のものを使用した。
3. 遺構名を以下のように略記した。
SI = 積穴住居、SX = 方形周溝墓、SK = 土坑、SD = 環濠
4. 遺構の縮尺は積穴住居・方形周溝墓・土坑1/80、環濠1/200である。
5. 方位はすべて座標北である。
6. 遺物番号は本文・挿図・写真図版で一致する。
7. 遺物の縮尺は土器・土製品1/4、石器1/2、石製模造品2/3である。
8. 炉跡・須恵器・灰釉陶器および土器の赤色塗彩・黒色塗彩はスクリーントーンによって表現した。
9. 遺構番号については調査時のものを下記のように変更した。

報 告 書	調 査 時	報 告 書	調 査 時	報 告 書	調 査 時
SI 001	H 012	SK 007	P 001	SK 025	D 013
SI 002	H 003	SK 008	P 004	SK 026	—
SI 003	H 002	SK 009	P 005	SK 027	D 018
SI 004	H 005	SK 010	P 006	SK 028	—
SI 005	H 001	SK 011	P 007	SK 029	D 014
SI 006	H 006	SK 012	D 010	SK 030	—
SI 007	H 007	SK 013	D 007	SK 031	D 015
SI 008	H 010	SK 014	D 008	SK 032	D 021
SI 009	H 009	SK 015	P 010	SK 033	—
SI 010	H 011	SK 016	D 012	SK 034	D 016
SI 011	H 008	SK 017	D 011	SK 035	D 020
SD 001	M 001	SK 018	—	SK 036	—
SK 001	D 009	SK 019	—	SK 037	—
SK 002	D 005	SK 020	—	SK 038	—
SK 003	D 003	SK 021	—	SK 039	—
SK 004	P 003	SK 022	D 017	SK 040	—
SK 005	P 002	SK 023	—	SK 041	—
SK 006	D 004	SK 024	D 019		

目 次

序 文
例 言
凡 例

I 序 章

1 調査にいたる経緯	1
2 遺跡の位置と環境	1
3 調査の概要	5

II 検出した遺構と遺物

1 竪穴住居跡	11
2 環濠	35
3 方形周溝墓	38
4 土坑	40
5 土坑群	40
6 グリッド出土土器・土製品	46
7 石器	46

III ま と め

1 弥生時代	51
2 古墳時代	51
3 奈良・平安時代	53
4 石製模造品について	53

IV おわりに

報告書抄録	卷末
-------	----

挿図目次

第1図 遺跡周辺図	2
第2図 調査区周辺の地形	4
第3図 遺構全体図	6
第4図 調査区位置図	7
第5図 旧石器調査区	8
第6図 SI001および出土土器	12
第7図 SI002および出土土器	14
第8図 SI003・004・005	16
第9図 SI003出土土器	17
第10図 SI005出土土器	18
第11図 SI006・007	20
第12図 SI006出土土器	21
第13図 SI007出土土器(1)・土製品	22
第14図 SI007出土土器(2)	23
第15図 SI008	25
第16図 SI008出土土器(1)	26
第17図 SI008出土土器(2)	27
第18図 SI008石製模造品分布図(1)	30
第19図 石製模造品(1)	31
第20図 SI009および出土土器(1)	33
第21図 SI009出土土器(2)	34
第22図 SI010および出土土器	36
第23図 SI011出土土器	36
第24図 SD001および出土土器	37
第25図 SX001	39
第26図 SK001および出土土器	39
第27図 北側土坑群（SK002～SK017）	42
第28図 南側土坑群（SK018～SK041）	43
第29図 土坑群出土土器(1)	44
第30図 土坑群出土土器(2)	45

第31図 グリッド出土土器・土製品	45
第32図 石器(1)	47
第33図 石器(2)	48
第34図 石器(3)	49
第35図 出土土器集成図	52
第36図 石製模造品(2)	55
第37図 SI1008石製模造品分布図(2)	57
第38図 白玉製作工程	58

表 目 次

第1表 石器一覧	50
第2表 石製模造品一覧	54
第3表 白玉法量一覧	54

図版目次

- 図版1 遠庭遺跡と周辺の航空写真
- 図版2 1 調査区近景
2 調査区全景
3 調査区東側
- 図版3 1 SI003
2 SI006
3 SI007
- 図版4 1 SI008 遺物出土状況(1)
2 SI008 遺物出土状況(2)
3 SI008 遺物出土状況(3)
- 図版5 1 SI009
2 SD001
3 南側土坑群
- 図版6 SI003・SI006出土土器
- 図版7 SI007出土土器および土製品
- 図版8 SI007・SI008出土土器
- 図版9 SI008・SI009出土土器(1)
- 図版10 SI008・SI009出土土器(2)
- 図版11 SI009・SI010・SD001・土坑群・グリッド出土土器
- 図版12 石器
- 図版13 石製模造品

I 序 章

1 調査に至る経緯

千葉県農林部は、東金市にある農業大学校にバイテク棟の建設を計画した。これに伴い、千葉県農林部より千葉県教育委員会へ、建設地内における埋蔵文化財の所在の有無および取り扱いについての照会があった。そこで、千葉県教育委員会は、この地域が弥生時代の集落遺跡として著名な道庭遺跡である旨を千葉県農林部へ回答し、遺跡の取り扱いについて慎重に協議を重ねた。その結果、事業計画の変更が困難であるということで、やむなく記録保存の措置を講じることで協議が整い、財団法人千葉県文化財センターを調査機関として指定した。

これに基づき、平成4年4月に千葉県農林部と財団法人千葉県文化財センターとの間で発掘調査の委託契約が締結され調査のはじめとなった。

2 遺跡の位置と環境

道庭遺跡は、地理的には千葉県の中央部にあり、千葉市の東約25kmに位置し、東金市に所在する。地形的には下総台地としては標高の高い部分である台地の東縁にあり、標高は50mを測る。しかし、また、東側には広大な九十九里平野が広がり、遺跡のある台地との間は約40mの断崖を形成している。下総台地を開拓したいく筋もの流れは、このような台地東縁でいくつかにまとまり小河川となって九十九里平野に流れ出て太平洋に注いでいる。本遺跡周辺のこのような環境は、少なくとも弥生時代以来さほど大きな変化はないものと思われるが、旧石器時代から縄文時代には遺跡の下を波が洗っていたこともあったと考えられる。

また、本遺跡の周辺には多くの遺跡が分布していることが確認されている。

旧石器時代の遺跡は、いまだ発見例は少ないが、本遺跡(1)の他、久我台遺跡(27)、井戸ケ谷遺跡(38)、滝東台遺跡(40)、小野遺跡(46)等がある。これらの遺跡からは石器ブロックや礫群が検出され、ナイフ形石器・ポイント・スクレイバー等が出土している。しかし、検出されたブロックは久我台遺跡の7か所が最高で、量的にはわずかであるといわざるを得ない。このことからすぐにこの地域に旧石器時代の遺跡が少ないと結論づけることは危険である。今後遺跡の深部まで意欲的に調査がなさればかなり増加するものと思われる。

縄文時代の遺跡は、草創期あるいは早期のものでは、本遺跡の他、蒲野遺跡(7)、新坂遺跡(9)、東風吹山遺跡(10)、西椎崎台遺跡(11)、武勝貝塚(13)、久我台遺跡、滝東台遺跡、南外輪戸遺跡(41)、小野遺跡等がある。これらの遺跡からは、陥し穴状の土坑や炉穴の他、蒲野遺跡からは住居跡が検出されている。また、南外輪戸遺跡から撲糸紋土器がやまとまって出土している他、久我台遺跡からは押型紋土器が出土している。前期の遺跡はいまのところ明らか



第1図 遺跡周辺図 (1/50,000)

ではないが、中期になると鏡音谷貝塚(8)や武勝貝塚等の貝塚がつくられ、小野遺跡からも住居跡が検出されている。後期も引き続きこれらの貝塚は存続するが、他の遺跡も含めて住居跡等の検出例はほとんどない。晩期は本遺跡や南外輪戸遺跡から少量の遺物が出土している程度である。以上縄文時代の遺跡を概観すると、草創期・早期の遺跡がやや目立つ他はいずれの時期も検出例が少なく、検出されても小規模な遺跡ばかりであることがわかる。このことは、旧石器時代とは異なり、ある程度調査が進展した段階においてとらえられた状況といえるため、まだ不確定要素はあるものの、この地域の縄文時代の様相の一端を表していると考えられる。

弥生時代の遺跡については、本遺跡で中期および後期の住居跡があわせて68軒、それに方形周溝墓が73基と規模の大きな集落を検出している他は、平蔵台遺跡(28)と久我台遺跡から住居や土器が少量検出されている程度である。仮に本遺跡がこの地域の拠点的な集落としても、あまりに突出した状況であり、この地域の弥生時代の様相をとらえるにはなお時間を必要とし、今後の集落遺跡の検出に期待するところが大きい。

古墳時代の遺跡のうちまず集落遺跡については、本遺跡のほか、油井古塚原遺跡(39)、小野遺跡等において、前期から後期まで継続して集落が営まれている。また、比良台遺跡(4)、西椎崎台遺跡、井戸向遺跡(24)、妙経遺跡(25)、久我台遺跡、平蔵台遺跡、海老ケ谷遺跡(34)、井戸ケ谷遺跡、滝東台遺跡、南外輪戸遺跡、滝木浦遺跡(45)等は、後期になって集落が形成され奈良平安時代まで継続するものがほとんどである。次に古墳においては、いまのところ小さい円墳ながら鏡を4面出土した島戸境1号墳(2)が唯一の前期古墳で、本遺跡の道庭古墳群、比良台遺跡の古墳、不動塚・西ノ台・駄ノ塚という首長墓クラスの古墳を擁する板附古墳群(6)、新坂遺跡の古墳、森台古墳群(14)、樅台古墳群(15)、湯坂古墳群(18)、天野古墳群(19)、家之子古墳群(20)、焼山古墳群(22)、松之郷馬場古墳群(23)、井戸谷古墳群(26)、大豆谷古墳群(37)、油井古塚原遺跡の古墳群、南外輪戸遺跡の菅谷古墳群、滝沢古墳群(42)、小野遺跡の古墳等そのほとんどが後期古墳である。さらに、玉崎神社裏横穴群(30)、上行寺裏横穴群(31)新宿横穴群(32)、岩崎横穴群(33)、谷横穴群(36)等もつくられ、集落の変遷とよく対応しておりまさに爆発的な増加といえる。このように後期にいたって集落および古墳が急激に増大する状況は一部の地域のみではなく、地域を越えてかなり広範囲において認められる現象である。そのため、その主たる要因を九十九里平野の開発によるものというよりも、谷津田および小河川という小地域ごとの開発による生産力の増大に求めたい。

奈良・平安時代の遺跡は、本遺跡の他、比良台遺跡、井戸向遺跡、妙経遺跡、久我台遺跡、海老ケ谷遺跡、井戸ケ谷遺跡、油井古塚原遺跡、滝東台遺跡、南外輪戸遺跡、滝木浦遺跡、小野遺跡等がある。これらは、前代から継続して営まれた集落であるが、その多くは規模を増大させている。また、山邊郡印が出土した滝台遺跡(43)や蒲野遺跡、東風吹山遺跡、外荒遺跡(44)等は、新たに集落を形成している。これに対して、前代にあった集落がこの時代に引き継がれ



第2図 調査区周辺の地形

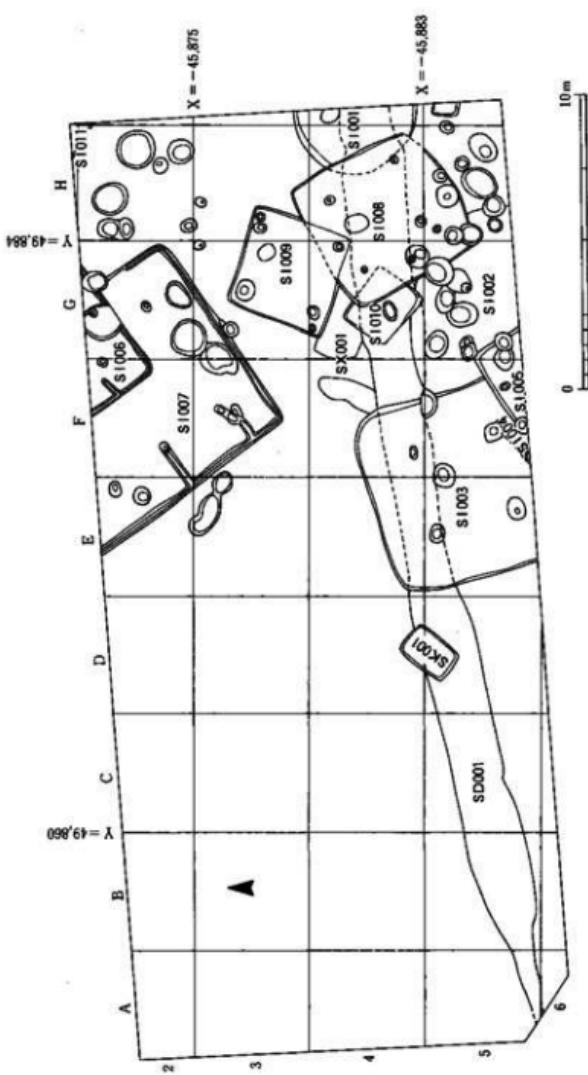
ない遺跡は西椎崎台遺跡等わずかである。このように、前代に比較して顕著なものとして指摘できるのは、一方では大規模な集落遺跡の増加であり、他方はこれにより小規模な集落遺跡との間により一層の格差が生まれたことである。生産力の増大は、引き続き小河川流域の開発が進展するとともに、この時代になって九十九里平野の開発が進展した結果とも考えられるがより広い耕地を維持する必要性も生じたものと思われる。

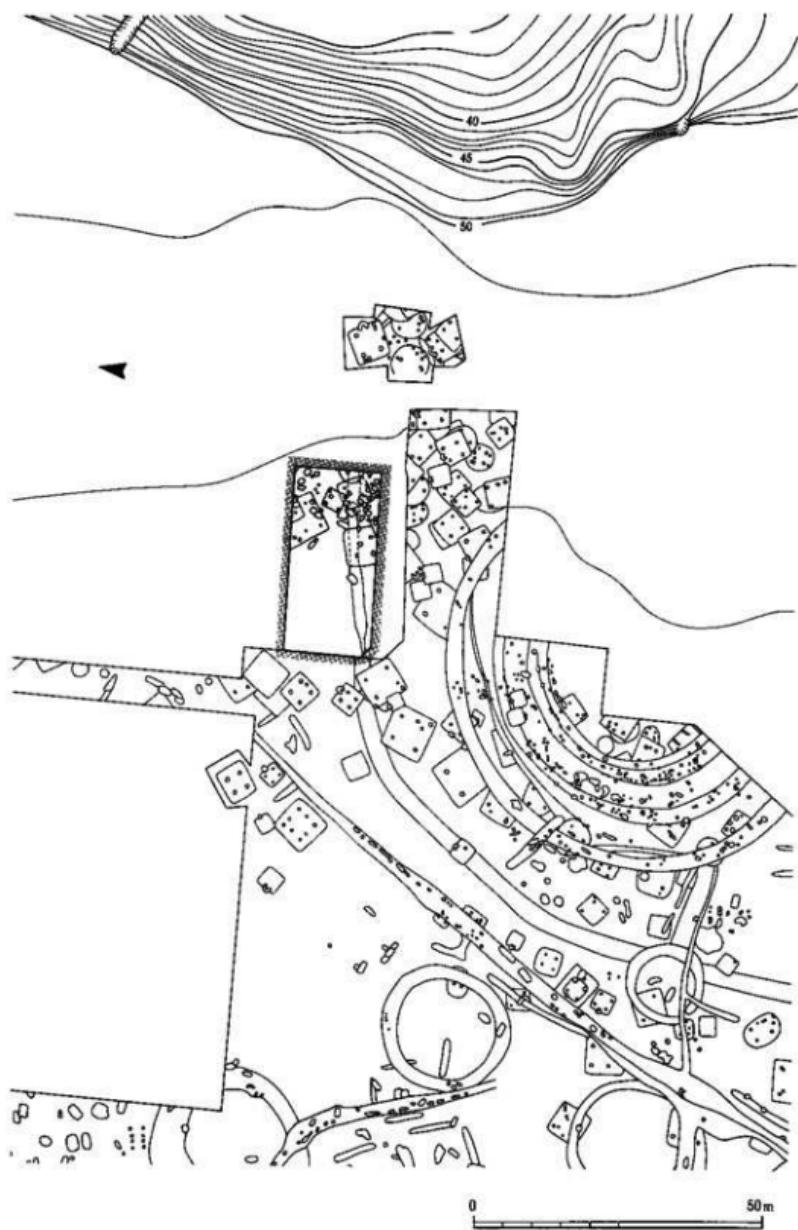
その他、古代寺院としては、湯坂廃寺跡(18)等いくつかあるが、なかでも真行寺廃寺跡(3)は調査の結果武射郡の郡寺であることが確認された。さらに、中世になると東金酒井氏の居城である東金城跡(35)のほか、津辺城跡(5)、森城跡(12)、酒藏城跡(16)、古内城跡(17)、湯坂城跡(18)、成東城跡(21)、久我台城跡(27)、田間城跡(29)、小野城跡(46)等多くの城跡がつくられた。

3 調査の概要

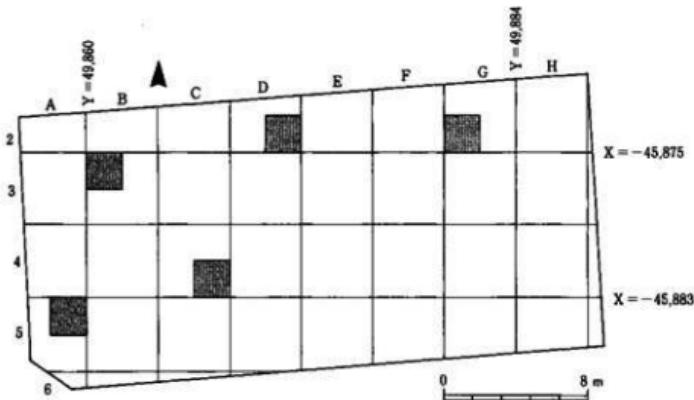
道庭遺跡は、面積が約250,000m²あり、周囲を九十九里平野と小河川の支谷により囲まれ、標高約50mの独立丘陵状のところにある(第2図)。現在はその大部分が千葉県農業大学校の敷地となっている。昭和52年から昭和54年にかけて千葉県農業大学校建設に伴う調査が行われ、弥生時代から奈良・平安時代にかけての大集落が検出された。現在までに、第1分冊として弥生時代集落篇、第1分冊別冊として弥生時代墓址篇、第2分冊として先土器時代、縄紋時代、古墳時代前・中期篇、以上3冊の報告書が刊行されている。それによると、先土器時代のものとしては竪穴状の落ち込み1基、石器集中ブロック1か所、礫群1か所が検出され、ナイフ形石器、スクレイパー等が出土している。縄紋時代の遺構は、早期のものと思われる陥し穴状遺構が31基検出されたのみであるが、土器は前期を主体に早期から晩期まで出土している。弥生時代の遺構としては、竪穴住居跡68軒、方形周溝墓73基(溝中土器棺墓11基)、木棺墓1基、土塼墓9基、土器棺墓1基、環溝1条が検出され、南関東系土器と北関東系土器の両者の特徴を備えたいわば折衷型の土器に対して下総型土器の名称が与えられている。また、古墳時代の遺構は、前・中期の竪穴住居跡125軒が検出されているとのことであるが、遺構の分布図等の詳細は明らかではない。さらに、いまだ未報告のため詳細は不明であるが、古墳時代後期の竪穴住居跡84軒、古墳26基、奈良・平安時代の遺構は竪穴住居跡120軒が検出されているとのことである。そのほか、必ずしも時代を特定できないが土坑多数が検出されている。このように、約50,000m²の調査で竪穴住居跡だけでも約400軒を検出しており、全体では1,000軒を越える竪穴住居跡があると推定される。この時の調査により、なかでも弥生時代中期後半の宮ノ台期の集落と墓域の存在が注目され、弥生時代の遺跡として著名になった。しかし、竪穴住居跡の数量では断然古墳時代のものが多く、特に前・中期のものが一番多い。つまり、いまのところ本遺跡の集落は、弥生時代の中期に始まり、奈良・平安時代まではほぼ継続して営まれるが、そのピークは古墳時

第3図 遺構全体図





第4図 調査区位置図



第5図 旧石器調査区

代の前・中期にあったものと考えられる。

今回の調査は、千葉県農業大学校の校舎であるバイテク棟建設に伴う調査である。調査面積は480m²で、調査期間は平成4年7月1日から平成4年8月31日である。今回は調査面積および調査期間とも少ないものであるが、以前の調査区でいえばI-A区の東側に隣接し、I-B区との間にあたる地点のため、遺構が多数検出されることが予想された(第3図)。そのため調査の方法も最初からバックホウにより調査範囲全面の表土剥ぎを行い、早期に遺構の種類と数量を把握することにした。しかし、調査地点は舗装されて千葉県農業大学校の駐車場となっており、作業はこの舗装の剥がしから行うこととなった。まず舗装および表土を剥いだ後、調査区内に1グリッドの大きさが4m×4mのグリッドを設定した。そして、西から東へA、B、C……、北から南へ1、2、3……とし、これを組みあせて北西の隅を基準に1A、1B、1C……の名称で呼称することにした。

調査の結果、上層においては調査区西端の一部が削平されていたが、調査区東側を主体に遺構がまとまって検出された(第3図)。弥生時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、方形周溝墓1基環濠1条が検出された。この環濠は前回の調査で検出された環溝の続きと思われる。また、古墳時代の遺構は、竪穴住居跡7軒が検出され、そのうちの1軒は石製模造品の工房跡で、滑石製の勾玉や白玉の未製品のはか多量の碎片が出土した。さらに、奈良・平安時代の遺構として竪

穴住居跡 1 軒が検出された。そのほか、土坑が41基検出されたが、調査範囲が狭いため時代や性格を明らかにしえないが、灰釉陶器等が出土しているためこのうちのいくつかは掘立柱建物跡の一部を構成する可能性が考えられる。なお、上層の遺構検出後、その全景の空中写真撮影を実施した。

そして上層遺構の調査終了後、引き続き下層における旧石器時代の確認調査を実施した。調査の方法は、2 m × 2 m の調査区を任意に5か所設定し、立川ローム層を順次掘り下げていくことにした。その結果、武藏野ローム層上面まで掘り下げて確認したが、石器類の出土はなく、埋め戻しをして調査を終了した。

また、整理作業は平成5年度に行われ、水洗からはじめ、注記、復元、図面整理、写真整理実測、拓本、トレース、挿図作成、写真撮影、図版作成、原稿執筆、報告書刊行まですべての作業を終了した。

周辺遺跡参考文献（番号は本文、地図に一致）

- (1) 小高春雄他 「道庭遺跡発掘調査報告書」道庭遺跡調査会 1983年
- (2) 平山誠一・椎名信也・車崎正彦 「千葉県山武郡山武町の前期古墳—鳥戸境1号墳発掘調査速報—」『古代』第96号 1993年
- (3) 沼沢豊他 「成東町真行寺廃寺跡確認調査報告書」千葉県教育委員会 1982年
沼沢豊他 「成東町真行寺廃寺跡研究調査概報」財団法人千葉県文化財センター 1983年
- (4) 天野努他 「成東町真行寺廃寺跡研究調査報告」財団法人千葉県文化財センター 1984年
- (4) 山口直人 「千葉県成東町比良台遺跡群—比良台・八坂台・真赤土遺跡—」財団法人山武郡市文化財センター 1992年
- (6) 軽部慈恩 「千葉県山武郡板附不動塚古墳」日本考古学年報4 1955年
軽部慈恩 「千葉県山武郡成東町板附西ノ台古墳」日本考古学年報7 1958年
- 白石太一郎・杉山晋作 「千葉県成東町駄ノ塚古墳の調査」日本考古学協会第53回総会発表要旨 1987年
- (7) 「山武郡市文化財センターレポート No.7—平成2年度—」 1992年
- (8) 清水潤三 「観音谷貝塚」日本考古学年報13 1965年
- (9) 「山武郡市文化財センターレポート No.7—平成2年度—」 1992年
- (10) 「山武郡市文化財センターレポート No.7—平成2年度—」 1992年
- (11) 「山武郡市文化財センターレポート No.7—平成2年度—」 1992年
- (13) 清水潤三 「武勝貝塚」日本考古学年報12 1964年
- 04 吉田章一郎他 「千葉県山武町森台古墳群の調査」青山学院大学森台遺跡発掘調査団
1983年

- (18)「湯坂遺跡」湯坂遺跡発掘調査団 1971年
中村恵次 「湯坂遺跡」日本考古学年報24 1973年
『湯坂遺跡群調査報告』山武考古学研究会 1975年
- (20)丸子亘 「千葉県東金市家之子古墳群緊急発掘調査概報」立正大学文学部論叢第30号
1968年
- (21)篠九郎彦 「成東城跡調査報告書」成東城跡調査団1971年
- (24)相山林雄他 「東金台遺跡Ⅰ」東金台遺跡調査団 1980年
- (25)相山林雄他 「東金台遺跡Ⅱ」東金台遺跡調査団 1980年
- (27)萩原恭一・小林信一 「東金市久我台遺跡－房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査告
書－」財団法人千葉県文化財センター 1988年
- (28)丸子亘他 「東金平蔵台遺跡発掘調査概報」千葉県教育委員会 1970年
- (31)「上行寺裏横穴6・7号横穴発掘調査報告書」東金市上行寺裏横穴群調査会 1983年
- (33)「山武都市文化財センター年報 No.4－昭和62年度－」 1989年
- (34)相山林雄他 「東金台遺跡Ⅲ」東金台遺跡調査団 1980年
- (35)西山太郎・井上哲朗 「千葉県中近世城跡研究調査報告書第9集－東金城跡・城山城跡発掘
調査報告－」財団法人千葉県文化財センター 1989年
- (38)谷句・糸川道行 「東金市井戸ヶ谷遺跡－房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
II－」財団法人千葉県文化財センター 1992年
- (39)「山武都市文化財センター年報 No.2・No.5～7」 1987・1990～1992年
- (40)「山武都市文化財センター年報 No.3～8」 1988～1993年
- (41)中西克也・中野修秀他 「東金市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡 滝・木浦Ⅱ遺跡発掘調査報
告書」菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡調査会 1985年
- (44)矢戸三男 「東金市・外荒遺跡発掘調査報告書」財団法人千葉県文化財センター 1988年
『山武都市文化財センター年報 No.6－平成元年度－』 1991年
- (45)桐谷優・大賀健他 「作畠遺跡」作畠遺跡調査会 1986年
『山武都市文化財センター年報 No.6・No.7』 1991・1992年
- (46)「山武都市文化財センター年報 No.4～No.8」 1989～1993年

II 検出した遺構と遺物

1 穫穴住居跡

SI001(第6図)

遺構

調査区東端の4Hおよび4Iグリッドを中心に位置し、SI008、SD001と重複関係をもつ。これらは調査時の所見からSD001→SI001→SI008の順に構築されたものと思われる。東側が調査区にかかるため、2/5ほどが調査区外となり未調査である。プランは隅丸方形というよりもやや円形に近い。整溝はなく、径は約4mで、中央よりやや北側に炉跡がある。壁はゆるく立ち上がり、壁高は15cmほどしかない。床面は中央部がやや窪み、床面にピットは認められない。

遺物

出土遺物はミニチュア土器以外は全て破片である。

1は壺形土器の口縁部破片で、口径は16.6cmを測る。内面上部にはハケ原体による刺突が羽状に施され、内面には赤彩を施す。

2・4は同一個体である。2は壺形土器の口縁部破片で、外面には縄紋原体の押捺を挟んで上下に連続結節紋を施し、内面には赤彩を施す。4は壺形土器の頸部破片で、外面には連続結節紋を施す。

3は壺形土器の口縁部破片で、口唇部に工具で交互に押捺が加えられ波状をなしている。

5は壺形土器の頸部から胴部にかけての破片で、頸部外面には羽状縄紋を施し、胴部との境には竹管状の工具による刺突を施す。胴部外面および頸部内面には赤彩を施す。

6は口縁部が小さく外反する椀で、口径は14.0cmを測る。内外面には赤彩を施す。

7は壺形土器の口縁部破片で、口径は13.6cmを測る。折り返し口縁で胴部内外面にはハケメを施す。

8は小形の壺形土器で、口径は6.3cmを測る。外面にはハケメを施す。

9は壺形土器の底部破片である。

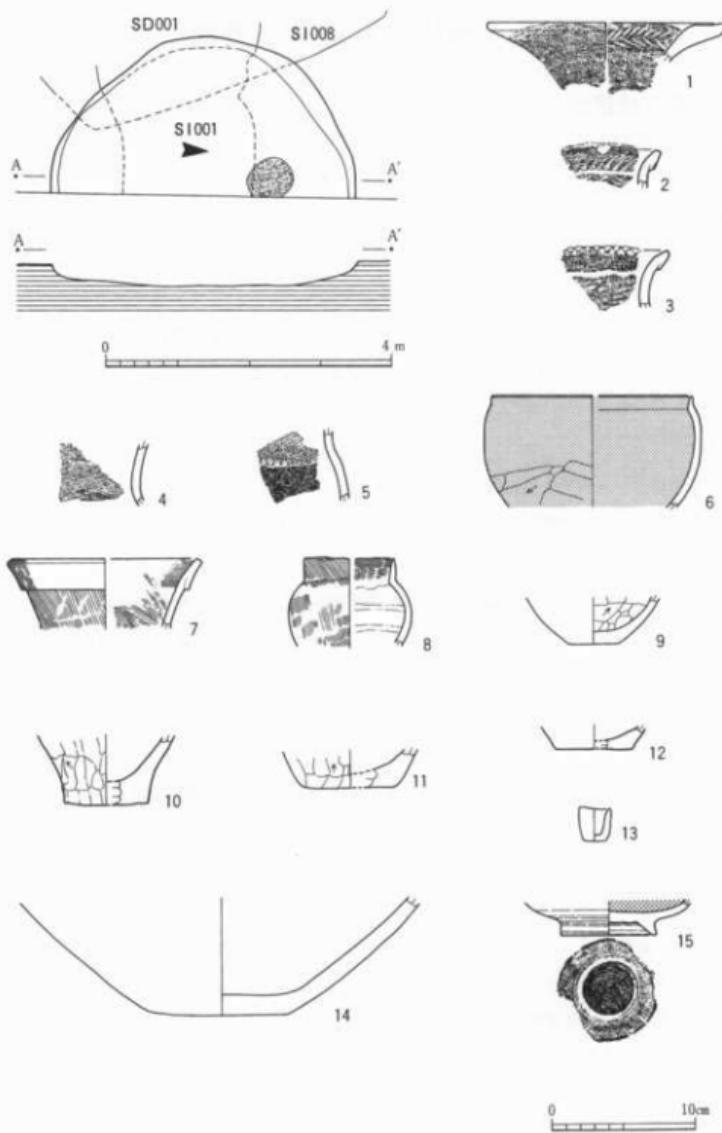
10・12は壺形土器の底部破片で、12の内面にはヘラによる調整痕が明瞭に残る。

11は壺形土器の底部破片である。

13はミニチュアの鉢形土器で、口径は2.0cm、器高は2.3cmを測る。

14は大形の壺形土器の底部破片で、内外面にはかなりの剥落がみられる。

15はロクロ土師器高台付椀の底部破片で、底径は6.7cmを測る。付け高台で糸切り痕を残し、高台から一端横に張ってから立ち上がるるもので、内面にはミガキがなされ黒色処理を施す。



第6図 SI001および出土土器

S1002(第7図)

遺構

調査区南東部の5Gグリッドを中心に位置し、SI003、SI005、SI008、SI010、SD001の各遺構と重複関係をもつ。調査時の所見からSD001→S1002→S1010→S1008およびSD001→S1002→S1003→S1005の二種類の関係が考えられ、出土遺物の検討よりこれらはSD001→S1002→S1010→S1003→S1005→S1008の順に構築されたものと思われる。南側が調査区にかかるため、約半分ほどが調査区外となり未調査である。また、後代の遺構との重複も多く、床面には多くのピットが穿たれている。プランは明らかではないが、やや円形であると思われる。壁の立ち上がりは明確ではないが、壁溝はないものと思われる。床面のピットもこの住居跡に伴うと思われるものはほとんどないが、炉跡はかろうじて半分ほど確認できた。

遺物

遺物は破片のみで少量出土した。

1は変形土器の上半部の破片で、口径は19.0cmを測る。口縁部はくの字に外反し、口縁部、胴部とも外面にはハケメを施す。口縁部内面にはヨコナデおよび一部ハケメを施し、胴部内面にはヘラケズリを施す。

2は大型の変形土器の下半部の破片で、胴部外面にはタテミガキを施し、底部外面にはミガキを施す。胴部内面にはハケメを施し、底部内面にはヘラケズリを施す。

そのほか、軽石が1点(第34図7 図版12-7)出土しているが後述する。

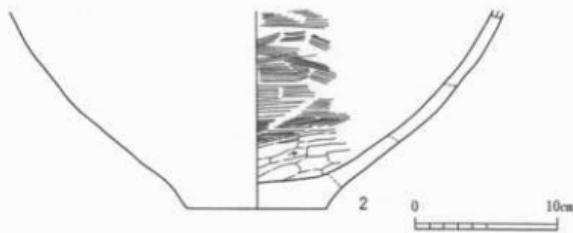
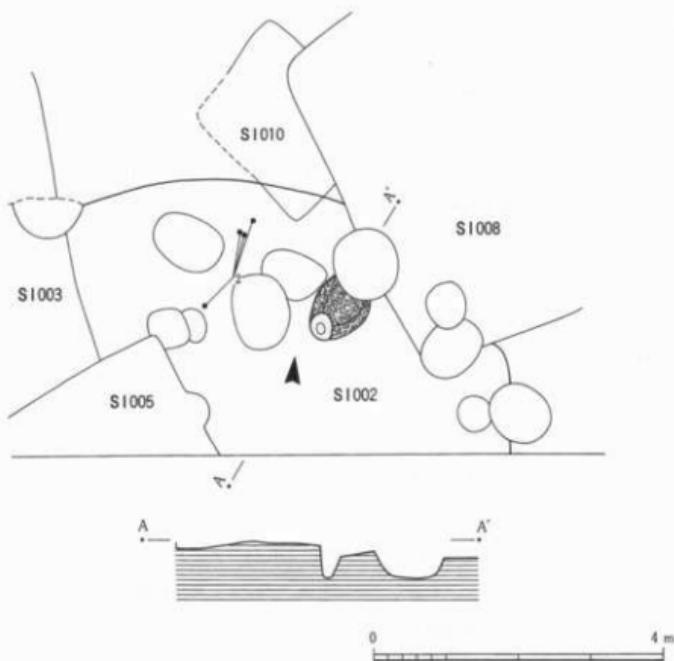
S1003(第8・9図 図版3・6)

遺構

調査区南側中央部の5Eおよび5Fを中心に位置し、SI002、SI004、SI005、SD001と重複関係をもつ。調査時の所見からSD001→S1002→S1003→S1004→S1005の順に構築されたものと思われる。南側が調査区にかかるため、一部が調査区外となり未調査であるとともに、S1003およびS1004により南東部の一部が破壊されている。プランは隅丸方形で、一辺約6.5mである。壁溝はなく、壁の立ち上がりも約20cmと浅い。床面のP1からP4のピットが主柱穴と思われ、深さは約60cmから80cmを測る。床面付近には焼土と炭化材がかなりの量検出され、火災にあったものと思われる。また、炉跡については確認できなかった。

遺物

1から4は変形土器の口縁部破片で、1は口径が21.0cmを測り、頸部外面にはこまかいハケメを施し、内面にはやや幅広のハケメを施す。2は口径が15.4cmを測り、胴部外面にはハケメを施し、内面にはナデを施す。3は口径が12.8cmを測り、内外面にはハケメを施す。4は口径が13.6cmを測り、口唇部外面には浅い押捺を加えている。



第7図 S1002および出土土器

5は完形に復元できた壺形土器で、口径が18.8cm、器高は20.3cmを測る。口唇部外面には4よりも強く押捺が加えられ波状となっている。胴部は肩が張り、胎土には粗粒の礫を多量に含み器面は荒れている。

6は壺形土器の口縁部破片で、口径が13.0cmを測り、二重口縁で内外面には赤彩を施す。

7・8・12・13は壺形土器の底部破片で、7は外面にはヘラケズリを施し、内面にはナデを施す。8は外面の剥落が著しく、内面にはミガキを施す。12は外面にはヘラケズリを施し、内面にはミガキを施す。13は外面にはヨコナデを施し、内面にはナデを施す。また、胎土には粗粒の礫を多量に含み器面は荒れている。

9から11は壺形土器の底部破片で、いずれも上げ底ないしは上げ底ぎみである。9は外面にはヘラケズリを施し、内面にはミガキを施す。10は内外面にはハケメおよび赤彩を施す。11は外面にはハケメとヘラケズリを施し、内面にはミガキを施す。

14は小形の鉢形土器で、口径は8.2cmを測り、上げ底である。内外面には赤彩を施す。

15は器台形土器で、口径は6.7cm、器高は20.3cmを測る。器受部から脚部までの貫通孔があり、内外面には赤彩を施す。

16は高壺形土器の脚部破片で、外面にはミガキを施し、内面にはナデを施す。二次焼成を受けている。

17から19は台付壺形土器の脚台部破片で、いずれも外面にはハケメを施す。17・19は内湾ぎみに開き、18は直線的に開く。

20はロクロ土師器高台付椀の底部破片で、底径は6.3cmを測る。付け高台で糸切り痕を残し、内面にはミガキがなされ黒色処理を施す。

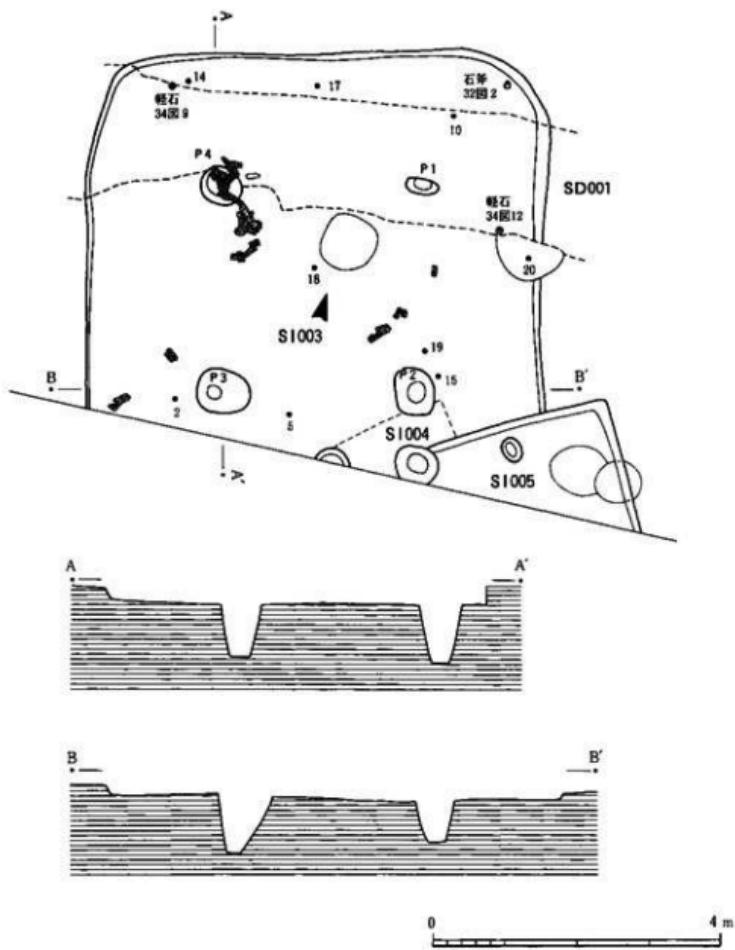
21・22は壺形土器の口縁部破片で、21は口唇部および口縁部外面にR L繩紋を施す。22は口唇部および口縁部外面にL R + Rの付加繩紋を施す。

そのほか、大型蛤刃石斧が1点（第32図2 図版12-2）、軽石が2点（第34図9・12 図版12-9・12）出土しているが後述する。

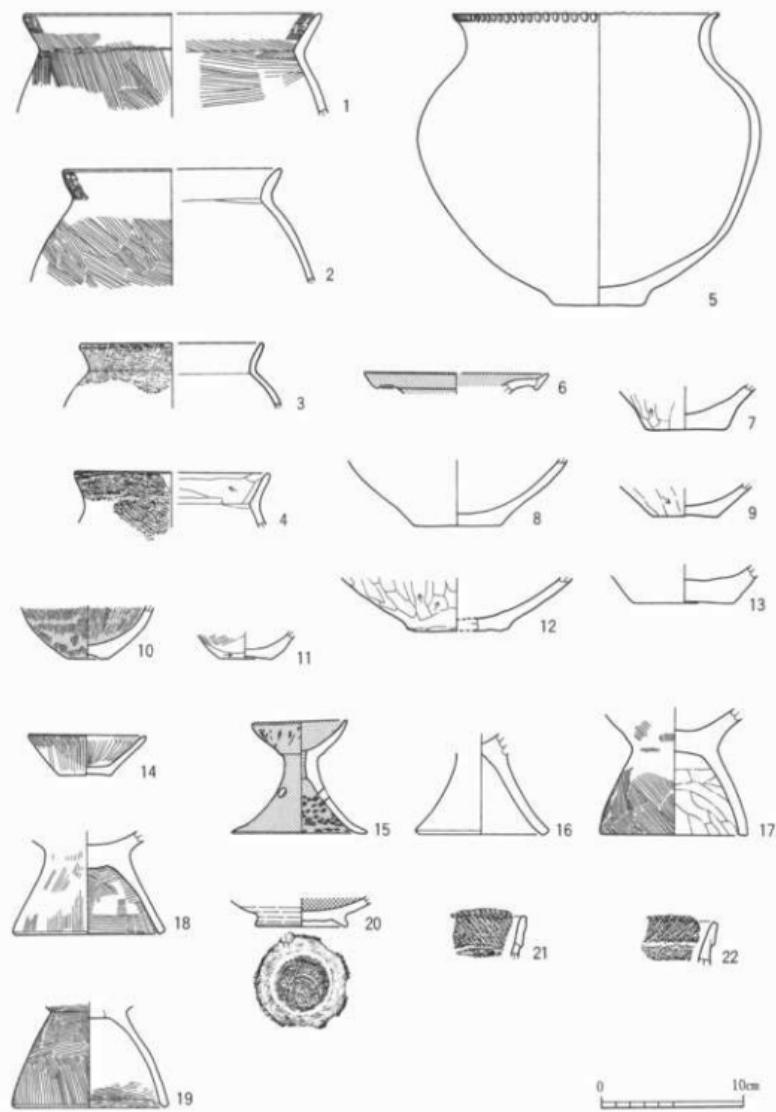
S1004（第8図）

遺構

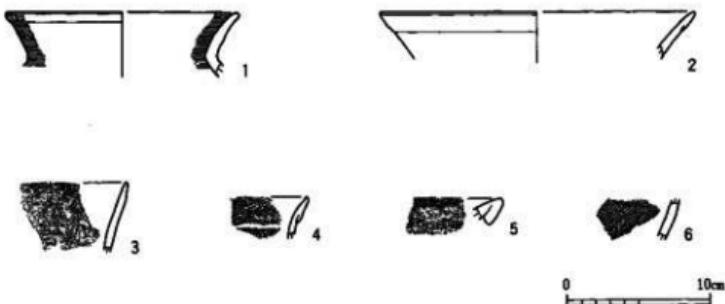
調査区南端の5Fグリッドに位置し、SI003、SI005と重複関係をもつ。調査時の所見からS1003→SI004→SI005の順に構築されたものと思われる。大半が調査区外となるが、SI005によっても大きく壊されている可能性がある。検出された部分がごくわずかなため得られる情報は少なく、炉跡や柱穴等は確認できないが壁溝はないものと思われる。



第8図 SI003・004・005



第9図 SI003出土土器



第10図 S1005出土土器

遺 物

出土遺物は僅少なため図示できるものはない。

S1005 (第8図)

遺 構

調査区南端の中央やや東側の5Fから5Gグリッドにかけて位置し、S1002、S1003、S1004と重複関係をもつ。これらは調査時の所見からS1002→S1003→S1004→S1005の順に構築されたものと思われる。大部分が南側の調査区外となり未調査である。また、土坑群の一部とも重複している。プランは方形になると思われるが、規模は不明であるが壁溝はない。壁高は約20cmを測り、炉跡や柱穴と思われるものは確認でなかった。

遺 物

出土遺物は全て破片である。

1は壺形土器の口縁部破片で、口径は18.2cmを測る。内外面にはヨコナデを施す。

2は壺形土器の口縁部破片で、口径は22.0cmを測る。薄い折り返し口縁である。

3は壺形土器の口縁部破片で、内外面にはハケメを施し、口唇部外面のみにナデを施す。

4・5は壺形土器の口縁部破片で、いずれも折り返し口縁である。4は口唇部および口縁部外面にはLRの繩紋を施す。5は外面にはハケメを施し、内面には赤彩を施す。

6は壺形土器の胴部破片で、同じく外面にはLRの繩紋を施す。

そのほか、軽石が1点（第34図16 図版12-16）出土しているが後述する。

S1006 (第11・12図 図版3・6)

遺構

調査区北端の中央より東寄りの2Fから2Gグリッドにかけて位置し、S1007と重複関係をもつ。調査時の所見からS1007→S1006の順に構築されたものと思われる。大部分が北側の調査区外となり、調査ができたのは約1/6ほどである。また、一部が土坑群とも重複している。プランは方形と思われ、規模は不明であるが、P2を柱穴、P1を梯子ピットと考えれば、辺約6mほどと推定される。壁溝が巡り、南西側には壁溝から柱穴と思われるP8近くまで小溝が検出され、間仕切り溝と思われる。また、南西隅のP9は貯蔵穴の可能性がある。

遺物

1から3は壺形土器で、須恵器模倣品である。口径は1が12.8cm、2が14.0cm、3が16.0cmを測る。いずれも口縁部が短く内傾し、体部は浅い。

4はクロロ土師器壺で、口径は15.5cmを測る。体部下端から底部にかけてヘラケズリを施す。

5・6は高壺形土器の脚部の破片で、壺部底部を接合するホゾ穴が残る。5は内外面ともハケメの上にナデを施す。6は外面にはミガキを施し、内面にはケズリを施す。

S1007 (第11・13・14図 図版3・7・8)

遺構

調査区北東部の2Fグリッドを中心に位置し、S1006と重複関係をもつ。調査時の所見からS1007→S1006の順に構築されたものと思われる。北側2/5ほどが調査区外となり未調査である。また、S1006と同様に土坑群とも重複している。プランは方形で、辺約7.5m×7.8mを測る。壁溝は東側の一部等を除いてほぼ全周すると思われるが、西側では壁溝から間仕切り状の溝が2か所において検出され、それぞれ柱穴と思われるP2およびP3まで延びていた。覆土は暗褐色土層を主体とし、壁高は深いところで確認面から約30cmを測る。

遺物

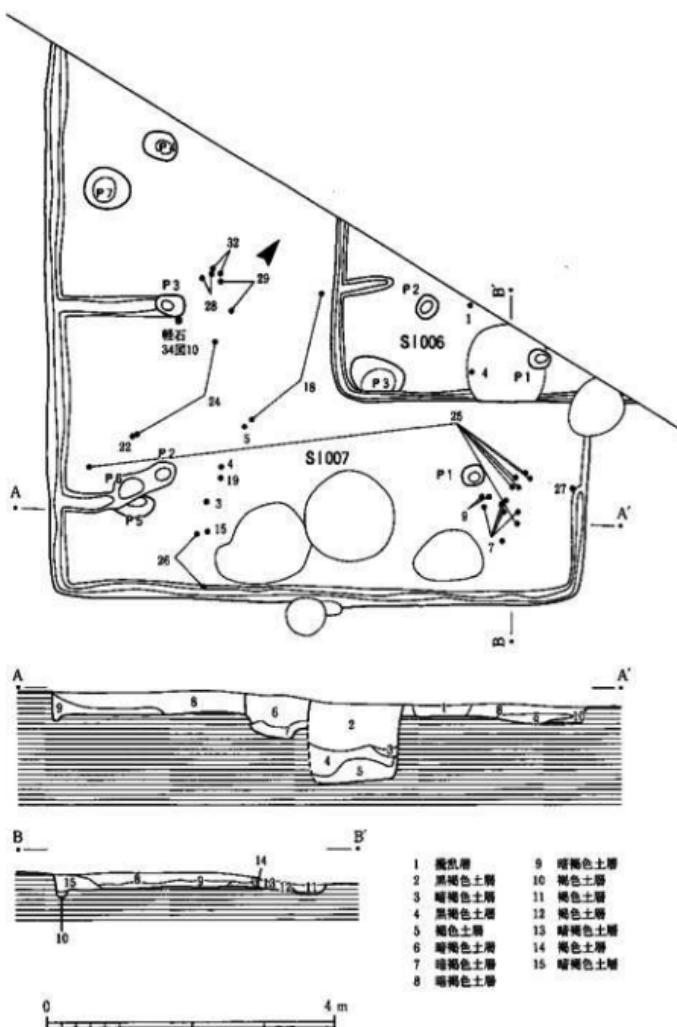
1～4は壺形土器で、口径はそれぞれ17.0cm、14.9cm、16.7cm、14.1cmを測る。いずれも口縁部内外面にはヨコナデを施す。そして体部外面にはヘラケズリを施し、内面にはナデを施す。なお、1・2は内外面、3は内面にそれぞれ赤彩を施す。また、4の底部外面には十字形に沈刻がある。

5は小形の壺形土器で、口径は9.3cmを測る。口縁部はやや外反して立ち、胴部はやや扁平である。内外面には赤彩を施す。

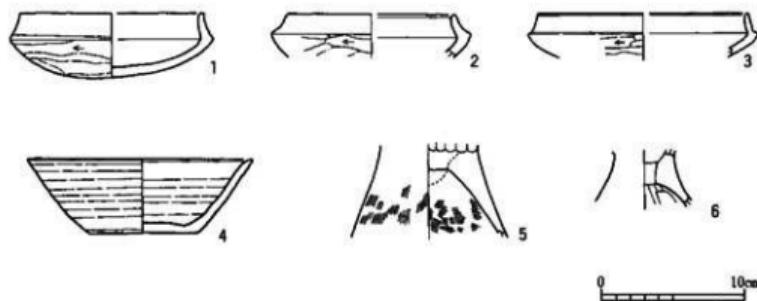
6は壺形土器の口縁部の破片で、口径は14.2cmを測る。内外面には赤彩を施す。

7は小形の壺形土器で、口縁部を欠く。外面にはヘラケズリを施し、内面にはナデを施す。

8は器台形土器の脚部の破片で、外面にはミガキを施し、内面にはナデを施す。



第11図 S1006・007



第12図 S1006出土土器

9・12・13は台付壺形土器の脚台部破片である。9は小形で内湾ぎみに開き、外面にはハケメの後にナデを施し、内面にはヘラケズリを施す。12は内外面にハケメを施す。13は器壁が厚く内外面ともにナデを施す。

10・11は高環形土器の脚部の破片である。10は端部が大きく開くタイプで、内外面ともにヘラケズリを施す。11はやや大形で内外面ともにハケメを施す。

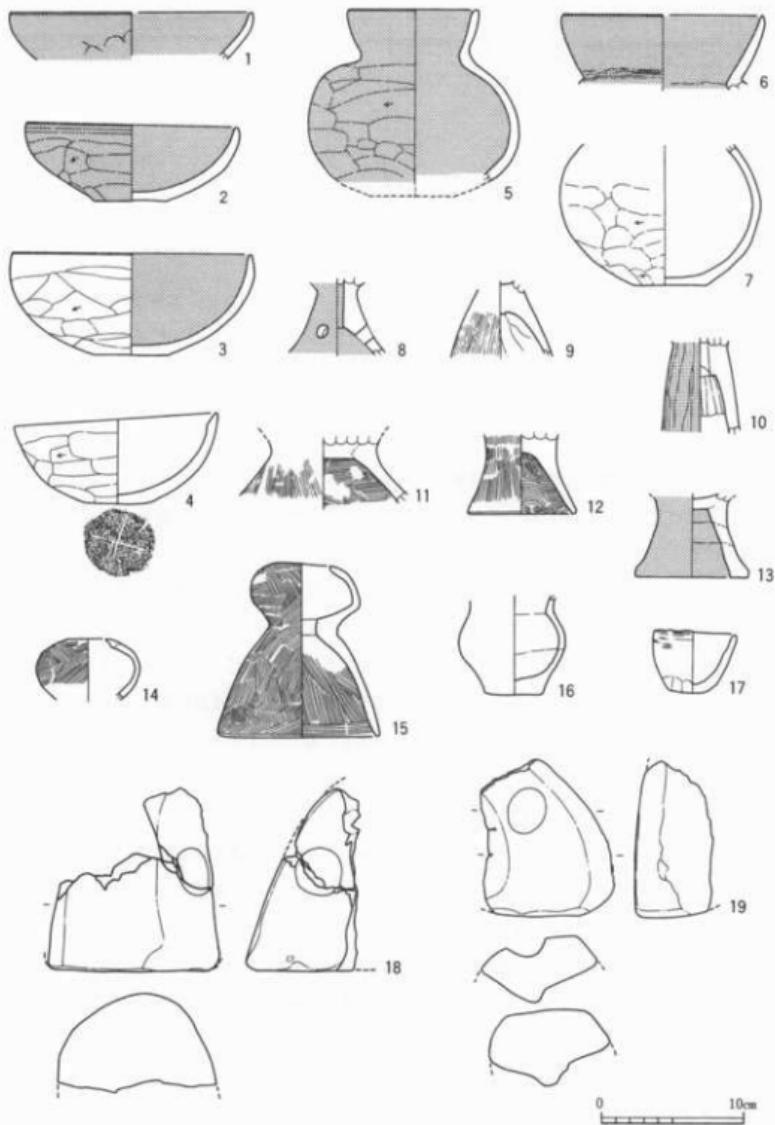
14・15はいわゆる炉器台である。14は器受部の破片で、最大径は7.4cmを測り、受部の孔径は2.7cmを測る。外面にはハケメを施し、内面にはナデを施す。15は器受部の最大径は7.9cmを測り、受部の孔径は3.0cmを測る。また、器高は12.1cmを測る。器受部は外面にはハケメを施し、内面にはナデを施す。脚部は内外面ともにハケメを施す。胎土には金雲母を少量含む。

16は小形の壺形土器で、口縁部を欠く。外面にはナデを施す。

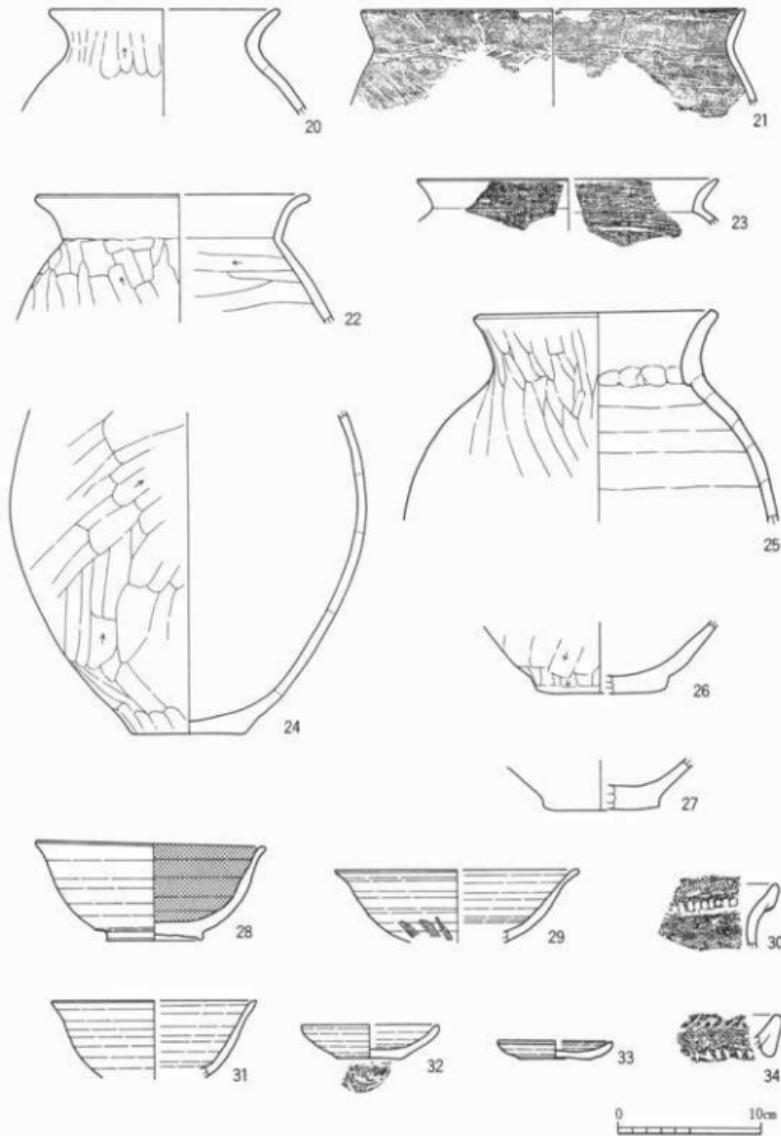
17はミニチュアの鉢形土器で、口径は5.7cmを測る。底部から内湾ぎみに開いて口縁にいたる。

18・19はいわゆる鳥帽子形土製支脚である。18は現存高12.1cm、現存底面最大幅12.6cmを測り、円形の窪みは径約3.5cm、深さ約1.2cmを測る。19は現存高9.2cm、現存底面最大奥行10.8cmを測り、円形の窪みは径約2.7cm、深さ約1.0cmを測る。18より19の方がやや小ぶりであるが、いずれも底部に最大幅をもち、本来はほぼ左右対称の位置に円形の窪みがあったものと思われる。胎土には金雲母を多量に含み、成形調整にはヘラケズリおよびヘラナデを施す。また、円形の窪みの下部には指による圧痕と思われる非常に浅い溝状のものがあり、使用時の握り痕ではないかと考えられる。

20から27は壺形土器である。20・22・24・25は、いずれも口縁部外面にはヨコナデを施し、頸部以下外面にはヘラケズリを施す。20は口径が16.0cmを測り、口縁部がくの字に外反する。22



第13図 SI 1007出土土器(1)・土製品



第14図 SI007出土土器(2)

は口径が16.0cmを測り、二段に外反する。24はやや長胴である。25は口径が17.0cmを測り、口縁部も弱く外反し、頸部内面には指頭による押捺が施され、胴部内面には輪積痕が顯著に残る。21・23はいずれも外面および口縁部内面にはハケメを施す。また、頸部以下の内面には21はナデを施し、23はヘラケズリを施す。26・27は底部の破片で、いずれも大きく開いて立ち上がる。

28はロクロ土師器高台付椀で、口径は15.7cmを測る。低い削り出し高台から内湾して立ち上がり口縁部は外反する。内面にはミガキがなされ黒色処理を施す。

29・31はロクロ土師器椀で、底部を欠くため明らかではないが、口縁部が外反する器形等28と共通する点もあり、高台付となる可能性がある。

30・34は壺形土器の口縁部破片で、いずれも折り返し口縁である。30は折り返し端部に繩紋原体の押捺を施し、外面にはL Rの斜行繩紋を施す。頸部外面には細くて浅い沈線が数条あり、細い竹管状の工具等でなでた痕ではないかと思われる。34は大きく開く口縁部で、折り返し端部に繩紋原体の押捺を施し、外面には羽状繩紋を施す。

32・33はロクロ土師器小皿で、32は口径が9.6cm、器高が2.3cmを測り、口高指数は24%である。底部は回転糸切りで、底部から大きく外反後内湾して口縁部にいたる。33は口径が8.0cm、器高が1.2cmを測り、口高指数は15%である。底部はやや上げ底で、小破片のため明らかではないが、ヘラ切りと思われる。底部から若干外反した後強く内湾して口縁にいたる。

S1008(第15図 図版4)

遺構

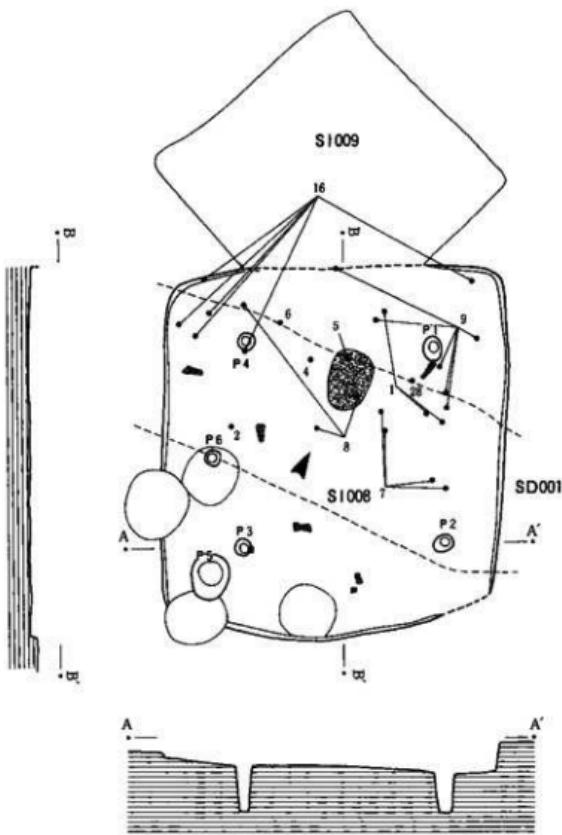
調査区南東側の4Hグリッドを中心に位置し、S1001、S1002、S1009、S1010、SD001、SK001の各遺構と重複関係にある。これらは調査時の所見から、SK001→SD001→S1002→S1010→S1008→S1009およびSK001→SD001→S1001→S1008→S1009の二種類の関係が考えられ、出土遺物の検討よりSK001→SD001→(S1001・S1002→S1010)→S1008→S1009の順に構築されたものと思われる。また、土坑群とも重複している。プランは方形であり、一辺約5mで壁溝はない。床面上のピットはP1からP4が主柱穴と思われ、深さは約50cmから70cmを測る。南側隅にあるP5は径が約60cm深さは約25cmを測り、工作用ピットの可能性がある。床面付近および覆土からは焼土と炭化材が出土し、火災にあったものと考えられる。

遺物

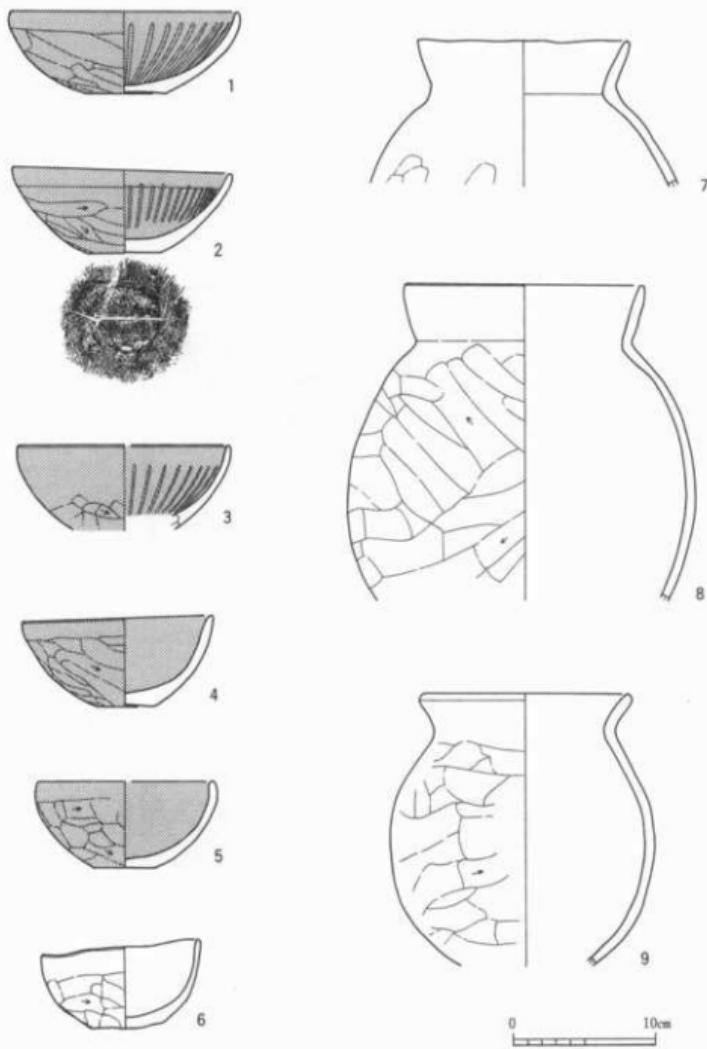
出土遺物には、土器の他、勾玉や白玉の未製品をはじめ多量の滑石の破片があり、石製模造品の工房跡と思われる。

土器(第16・17図 図版8~10)

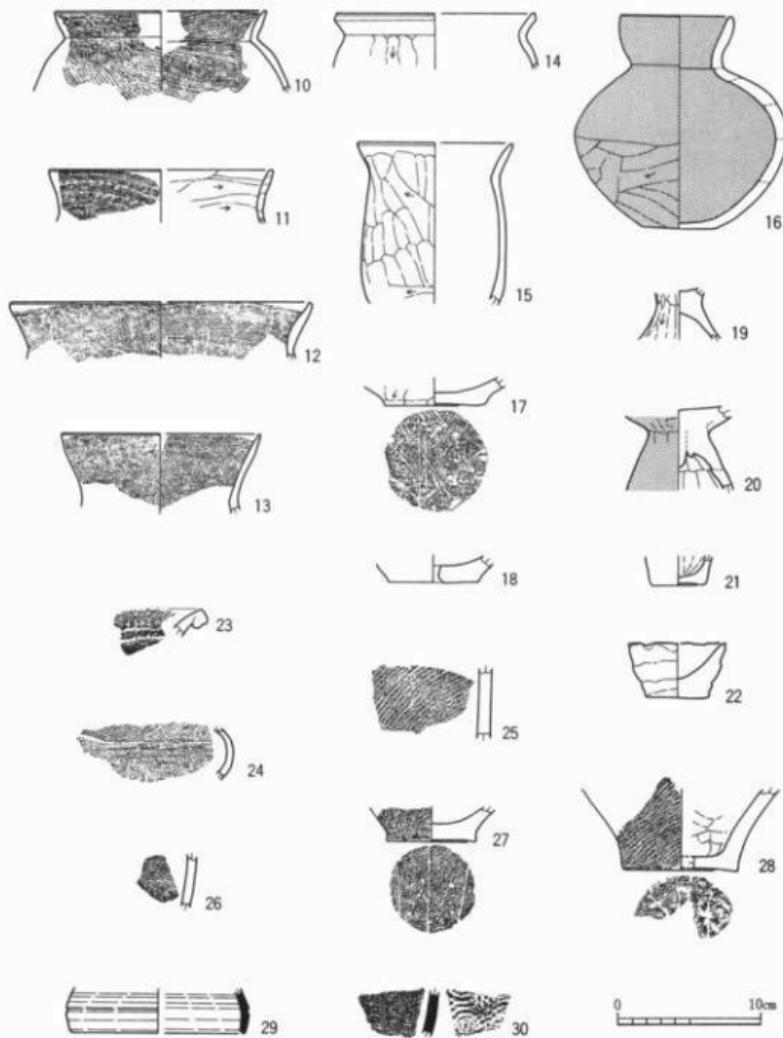
1から6は壺形土器である。1・2・3は口径がそれぞれ15.7cm、15.2cm、14.9cmを測り、いずれも体部内面にはナデを施した後、タテミガキを施し、内外面には赤彩を施す。また2の底



第15図 SI008



第16图 SI008出土土器(1)



第17図 SI008出土土器(2)

部外面には一条の沈刻がある。4・5は口径がそれぞれ13.3cm、12.0cmを測り、ともに内外面には赤彩を施す。6は口径が10.8cmで、口縁および底部とともにやや波を打つ。

7から9は壺形土器である。口径はそれぞれ14.8cm、16.8cm、14.2cmを測る。7は外面にはナデを施すが、部分的にヘラケズリが残る。

10から14は壺形土器の口縁部破片で、口径はそれぞれ14.7cm、15.6cm、21.0cm、13.8cm、14.0cmを測る。10・12・13はいずれも内外面にハケメを施し、11の外面には輪積み成形痕が明瞭に残る。

15は小形の壺形土器で、口径は10.8cmを測る。口縁部はゆるく外反し、長胴である。

16は壺形土器で、口径は7.8cm、器高は14.8cmを測る。口縁部は内湾ぎみにゆるく外反して立つ。胴部はやや瓢形で、内外面には赤彩を施す。

17は壺形土器の底部破片で、底径は7.0cmを測り、底部外面には木葉痕が残る。

18は瓶形土器の底部破片で、底径は6.4cm、孔径は0.7cmを測る。穿孔は内外面の両方から施す。

19・20は高壺形土器の脚部破片で、20の外面には赤彩を施す。

21・22はミニチュアの鉢形土器である。22は口径が7.8cmを測り、手づくねによる輪積み痕が残る。

23は壺形土器の口縁部破片で、折り返し口縁である。

24は壺形土器の体部破片で、外面には沈線を一条挟み、上部には繩紋を施し、下部にはナデを施す。

25・26は壺形土器の胴部破片で、25は外面には繩紋を施す。26は外面にはS字結節紋を挟み上部には繩紋を施し下部にはミガキを施す。

27・28は壺形土器の底部破片で、それぞれ底径は6.0cm、7.6cmを測る。ともに外面には繩紋を施し、底部外面には木葉痕が残る。

29は須恵器蓋坏の蓋の口縁部から天井部にかけての破片で、基部径は11.9cmを測る。

30は須恵器壺の胴部破片で、内面には同心円のタタキ目が残る。

石 器（第32～34図 図版12）

石器は、扁平船刃石斧が1点（第32図1 図版12-1）、磨石が2点（第33図3・6 図版12-3・6）、軽石が3点（第34図13・14・17 図版12-14・17）出土している。これらについて詳しく述べるが、軽石3点にはいずれも研磨痕が認められるなど、すべてではないにしろこれらのうちのいくつかは石製模造品製作に関わる工具としての用途が推定される。

石製模造品（第18・19図 図版13）

S1008からは土器や石器のほかに、滑石を材料とした石製模造品が全部で2,548点出土し（S1008以外からの出土は3点のみ）、この遺構が住居跡であるとともに工房跡でもあることを物語っている。この石製模造品は一部に勾玉や白玉の未製品がみられるものの、ほとんどは製作途中

に捨てられた碎片である。またこれらの碎片は、工房跡から均等に出土したわけではなく、ある程度集中した分布を示す。これらの集中する現象は、遺構内への土砂の流入を考えれば必ずしも原位置を保っているとは考えられないが、すべてを搅乱の結果ともいいがたく石製模造品製作に関わるいくつかの作業はある程度反映したものと考える。そこで分布図をみると、大きな集中個所が南側の壁よりに一か所あり、さらにその回りに小さなまとまりが4か所ほどみられる。つまり何人の人がどれだけの期間作業を行ったかということを導き出すのは容易なことではないが、おおよそ5か所において何らかの作業が行われたことは推定できるのではないかと思われる。

1は勾玉の未製品で、穿孔の段階まで行っているが、側面を打ち欠いて整えているときに予定外の剥離が起きてしまったものと思われる。長さ4.22cm、幅2.45cm、厚さ0.50cm、重量8.33gを測る。また、孔径は1cm強で、穿孔方向は一方向である。

2も勾玉の未製品で、側面の調整加工を行っている段階のもので、穿孔はまだ行われていない。長さ4.37cm、幅2.30cm、厚さ0.42cm、重量7.54gを測る。

3は板状の剥片で、表裏両面ともにまだ研磨は行われていない。側面には剥離痕が多数みられることから、側面にやや粗い調整加工を行っている段階のものと思われる。長さ3.67cm、幅3.35cm、厚さ0.71cm、重量14.19gを測る。

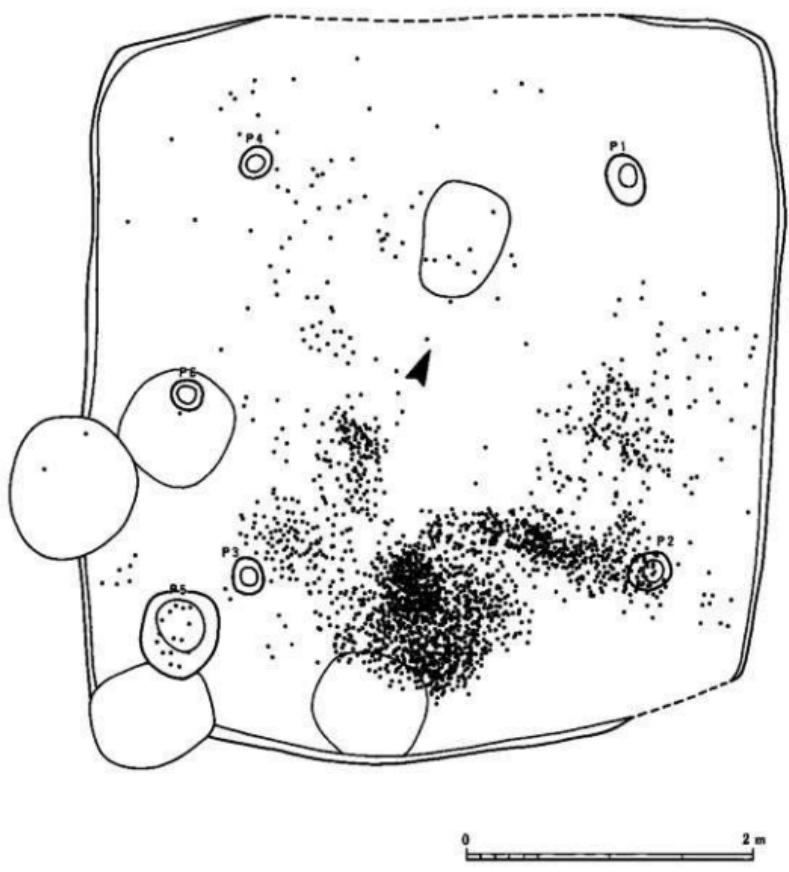
4・5は細長く、断面がやや三角形の剥片で、新鮮な剥離痕がみられないことからこの形で持ち込まれた可能性がある。いわば素材と考えられるが、形状からはさほど良質とは思われず、使用されないで遺棄されたものとも思われる。4は長さ4.20cm、幅1.87cm、厚さ0.71cm、重量6.03gを測る。

6から9は両面が研磨され、側面の調整加工を行っている段階のものと思われる。7は少し穿孔しかけた痕がみえる。6は長さ2.36cm、幅2.18cm、厚さ0.31cm、重量2.56gを測る。

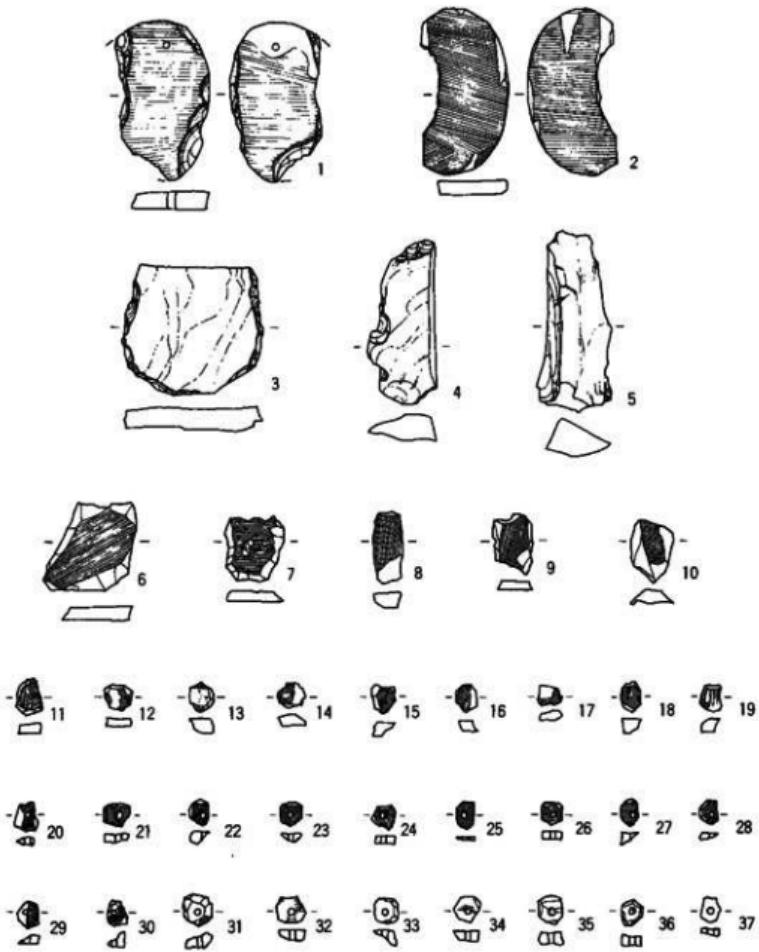
10は片面に研磨痕が残るやや大きな剥片である。両面研磨後の側面の粗い調整加工の段階の剥片、またはこの粗い調整加工が目的どおりにいかなくて欠損してしまったものではないかと推定される。長さ1.41cm、幅1.07cm、厚さ0.35cm、重量0.65gを測る。

11から19は穿孔できる状態に近づいた段階のもので、穿孔後の最終段階の調整加工を除き、一応側面の調整加工がほとんど終了した段階のものといえる。もちろんこのすべてがこれより先の段階、つまり穿孔されることになったかは不明であり、この段階で遺棄されたものもあるものと思われる。12は径0.65cm、厚さ0.24cm、重量0.19gを測る。

20から23、25、27から33、37は穿孔段階まで行ったが、穿孔がうまくいかなくて遺棄されたものと思われる。多くは穿孔時に片側が破損してしまったためと考えられる。23は径0.64cm、厚さ0.30cm、重量0.09gを測る。このグループは、平面的には穿孔が成功しているように見えるものであるが、穿孔が途中で止まっていたり、孔のところで割れているものなどはさらに多くあ



第18図 SI 008石製模造品分布図(1)



第19図 石製模造品(1)

る。

24・26・34・35・36は穿孔が終了して、さらに次の段階の最終的な仕上げの調整加工が施される可能性のあるものである。穿孔が行われ、平面的には多角形で、断面が扁平で方形のものがこの段階の一般的な姿ではないかと思われる。

S1009(第20・21図 図版5・9~11)

遺構

調査区東側の3Gグリッドを中心に位置し、S1008、SX00と1重複関係をもつ。これらは調査時の所見からSX001→S1008→S1009の順に構築されたものと思われる。プランは方形で、一辺約3.5mを測る。壁溝はなく、床面上のピットはP1からP6まで6本認められ深さは約10cmから40cmとやや浅めであるが柱穴と思われる。壁高は確認面から約30cmで、覆土は暗褐色土層を主体とする。また、床面付近には少量の焼土が認められた。

遺物

1から3は壺形土器で、いずれも口縁部内外面にはヨコナデを施し、体部外面にはヘラケズリを施す。また、体部内面にはナデを施す。1は口径が8.6cmを測り、内外面には赤彩を施す。

2は口縁部欠損、内外面には赤彩を施す。3は体部が瓢形で、口径が13.2cm、器高が17.8cmを測り、口縁部および体部上半部には内外面に赤彩を施す。

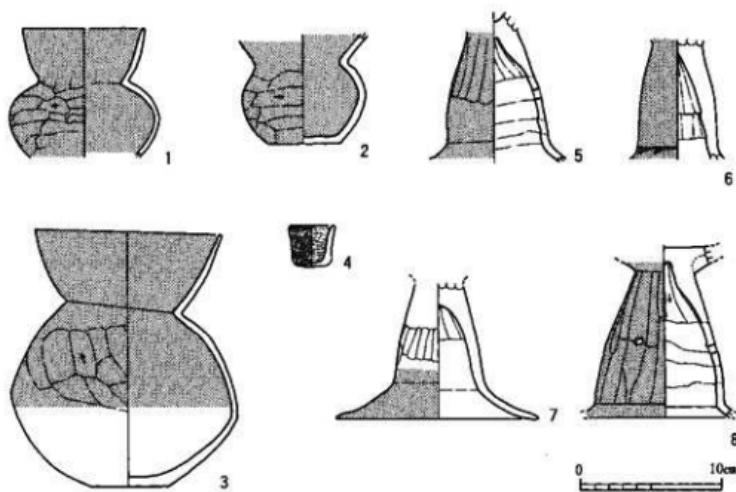
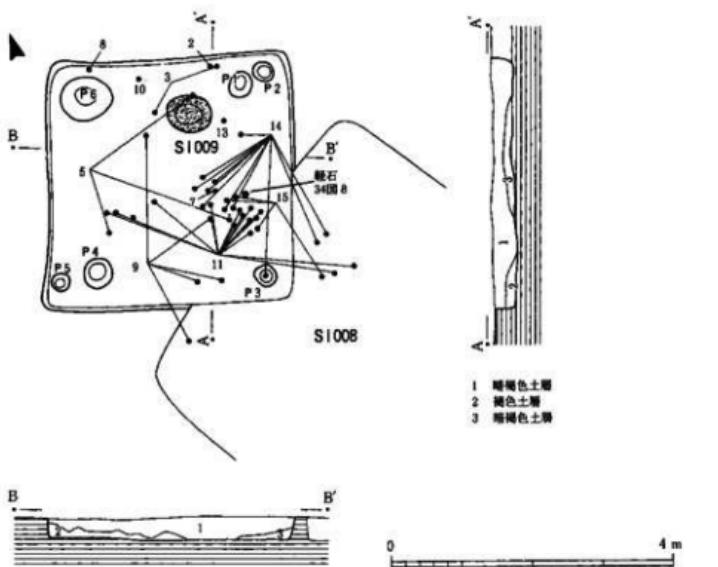
4はミニチュアの鉢形土器で、口径は3.2cm、器高は2.85cmを測り、内外面にはハケメを施す。

5から8は高壺形土器の脚部破片で、5は内外面上半部にはヘラケズリを施し、下半部にはナデを施す。また、外面には赤彩を施す。6は外面にはナデを施した後、赤彩を施す。また、内面にはヘラケズリを施す。7は外面中ほどおよび内面上部にはヘラケズリを施し、その他の内外面にはヨコナデを施す。また、外面下半部には赤彩を施す。8は外面および内面上部にはヘラケズリを施し、内面下半部には輪積み痕が残る。また、外面には赤彩を施す。

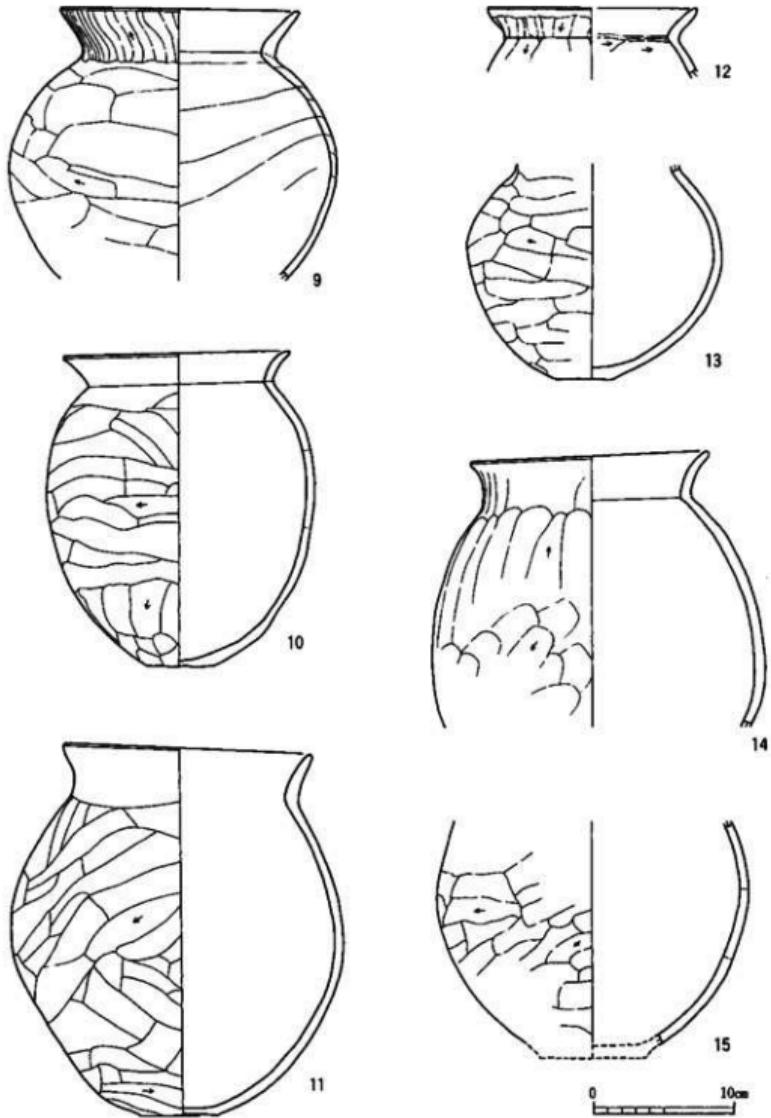
9から15は壺形土器である。9は口縁部外面にはヘラケズリを施し、胴部内面には輪積み痕が残る。口径は16.75cmを測る。10・11は口縁部内外面にはヨコナデを施す。10の口径は15.08cmを測り、器高は21.50cmを測る。11の口径は17.5cmを測り、器高は25.4cmを測る。12は口縁部内外面にはヨコナデを施し、頸部以下内外面にはヘラケズリを施す。口径は14.6cmを測る。

13・15はともに胴部外面にはヘラケズリを施し、内面にはナデを施す。14は口縁部外面にヘラミガキを施す。口径は16.1cmを測る。

そのほか、軽石が1点(第34図8 図版12-8)出土しているが後述する。



第20図 S1009および出土土器(1)



第21図 S1009出土土器(2)

S I 010 (第22図 図版11)

遺構

調査区南東部の4Gグリッドに位置し、S I 002、S I 008、S D 001、S X 001と重複関係をもつ。これらは、調査時の所見からS X 001→S D 001→S I 002→S I 010→S I 008の順に構築されたものと思われる。プランは方形で、2m×2.2mと小形である。壁溝はなく、炉跡や柱穴も認められない。整高は約25cmを測る。

遺物

1は壺形土器である。口径は11.0cm、器高は14.5cmを測る。口唇部および薄い折り返し口縁下端には繩紋原体を押捺し、口縁部および胴部には羽状繩紋を施す。また、頸部には櫛状工具(10齒)による下向きの連弧紋を二段施し、その下には同じ工具で簾状紋を施す。底部外面には木葉痕が残る。

2は壺形土器の胴部破片である。外面にはハケメを施すとともに、刺突列を1条施す。

3は壺形土器の頸部から胴部にかけての破片である。外面上部には撫糸紋を施し、その下には沈線を5条と刺突列を施す。

4は壺形土器の底部破片で、底径は6.0cmを測る。外面にはヘラケズリを施し、内面にはナデを施す。

S I 011 (第23図)

遺構

調査区北東隅の2Hグリッドを中心に位置する。大部分が調査区外になるため詳細は不明である。

遺物

1はクロロ土師器壊の体部破片で、底径は6.4cmを測る。底部外面にはヘラ調整を施し、体部外面下端にはヘラケズリを施す。

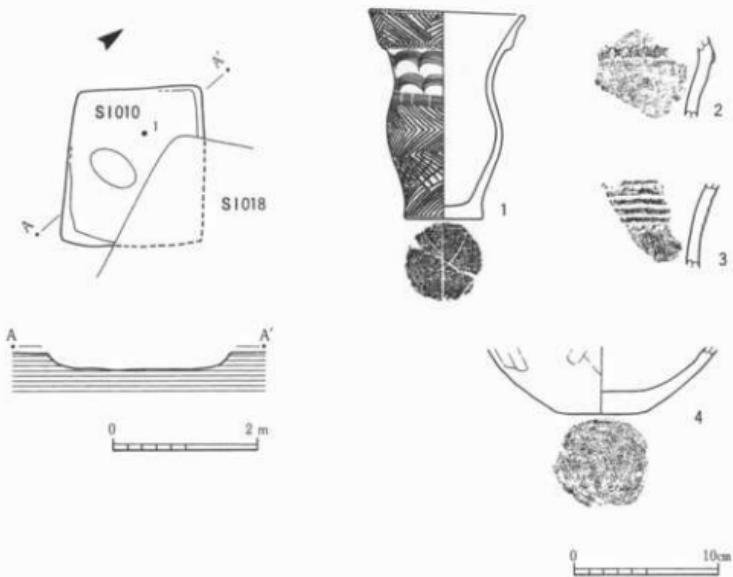
2は長形壺の頸部破片で、外面には釉を施す。

2 環溝

S D 001 (第24図 図版2・11)

遺構

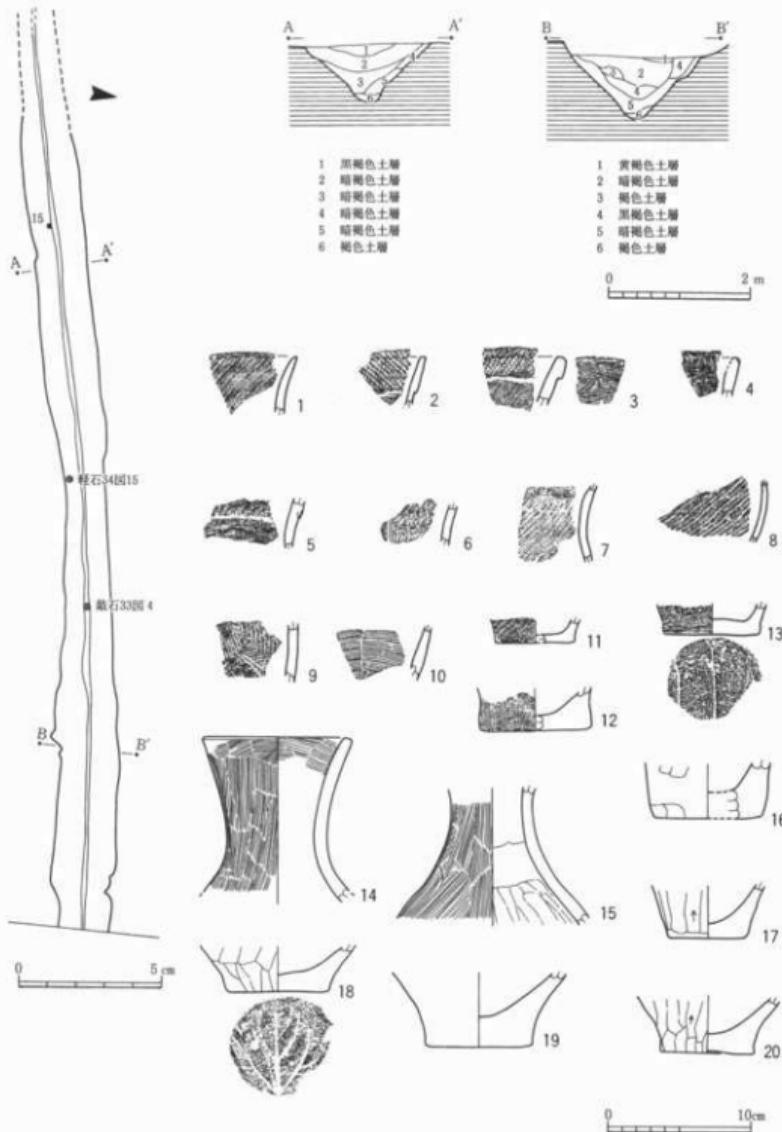
調査区を東西に継断する溝で、数多くの遺構と重複関係を持つ。これらは、調査時の所見からS X 001が一番最初に構築され、次にS D 001が構築されたものと思われる。この溝は以前に行われた調査時に環溝とされたものの続きと考えられるため、ここでは集落を取り囲む溝という意味で環溝と呼称する。今回調査した長さは約32mを測り、西端部分の上部が少し削平を受



第22図 SI010および出土土器



第23図 SI011出土土器



第24図 SD 001および出土土器

けていた。幅は約2mで深さは約0.9mを測り、断面の形態はV字形である。覆土は暗褐色土層を主体とする。

遺物

1から4は壺形土器の口縁部破片である。1は口唇部および口縁部外面には附加条縄紋を施す。2・3はともに口唇部および口縁部外面にはLR縄紋を施す。また、3の内面および頸部外面にはハケメを施す。4は口唇部に櫛状工具による押捺を施す。

5から10は壺形土器の頸部および胴部の破片である。5は口縁部外面下端に縄紋原体の押捺を施す。6は外面に懸垂紋と櫛描き波状紋を施す。7・8はともに外面に附加条縄紋を施す。9は外面に沈線で山形に区画した中に羽状縄紋を施し、無紋部には赤彩を施す。10は外面に懸垂紋と櫛描き平行線紋を施す。

11から13は壺形土器の底部破片である。11は底径が5.3cmを測り、外面には附加条縄紋を施す。12は底径が7.8cmを測り、外面には縱方向のハケメを施す。13は底径が6.4cmを測り、外面にはヘラケズリを施す。また、底部外面には木葉痕を残す。

14・15は大形の壺形土器の口縁部および頸部の破片である。14は口径が10.4cmを測る。口縁部内外面および頸部外面にはハケメを施し、頸部内面にはナデを施す。また、口唇部は角頭状をなす。15は外面にはハケメを施し、内面上部にはナデを施す。また、内面下部にはヘラケズリを施す。

16から20は壺形土器の底部破片である。16は底径が7.4cmを測る。外面にはヘラケズリを施した後にナデを施し、内面にはヘラケズリを施す。17は底径が5.4cmを測る。外面にはヘラケズリを施し、内面にはナデを施す。18は底径が7.0cmを測る。内外面にはヘラケズリを施し、底部外面には木葉痕を残す。19は底径が7.5cmを測る。内外面にはナデを施す。20は底径が6.5cmを測る。外面にはヘラケズリを施し、内面にはミガキを施す。

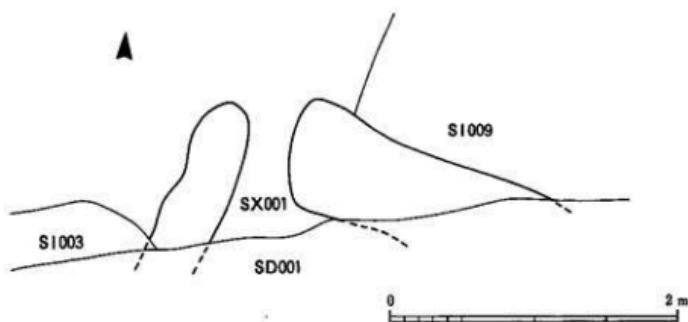
そのほか、敲石と軽石が各1点（第33図4 図版12-4、第34図15 図版12-15）出土しているが後述する。

3 方形周溝墓

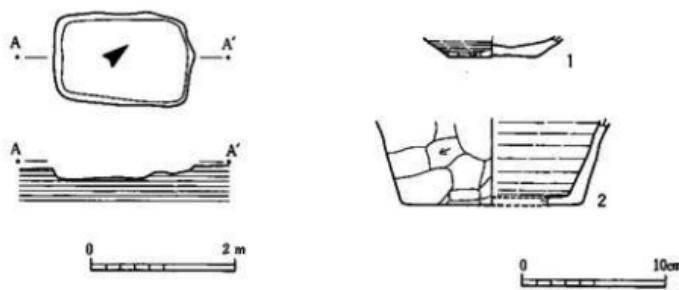
S X 001 (第25図)

造構

調査区東側の4Fから4Gグリッドにかけて位置し、SI002、SI003、SI008、SI009、SI101、SD001の各遺構と重複関係をもつ。これらは、調査時の所見からSX001→SD001→SI002→SI101→SI003→SI008→SI009の順に構築されたものと思われる。このようにSX001の構築後に多くの遺構が次々に重複してつくられたため、最初に作られたSX001の遺存状況はよくない。かろうじて一か所の陸橋部分とそれを挟む両側の周溝部の一部が残っていた。全体の規模



第25図 SX 001



第26図 SK 001および出土土器

は不明であるが、以前の調査時に検出された方形周溝墓の大半が四隅に陸橋部分を残すタイプであったので、これも同様のものである可能性が高い。周溝部の規模は、確認面における幅がそれぞれ1.4mと0.8mを測り、やや異なる大きさである。

遺 物

出土遺物は認められなかった。

4 土 坑

SK 001 (第26図)

造 構

調査区中央部やや西側の4Dから5Dグリッドにかけて位置し、SD 001と重複関係をもつこれらは、SD 001→SK 001の順に構築されたものと思われる。プランは方形で、1.9m×1.2mを測る。底面はやや傾斜しており、深いところで確認面から約20cmを測り、全体的に浅いつくりである。

遺 物

1はロクロ土師器壺の底部破片で、底径は6.1cmを測る。底部および底部周辺にはヘラケズリを施し、内面にはミガキを施す。

2は壺形土器の底部破片で、底径は12.4cmを測る。底部および外面にはヘラケズリを施す。

5 土坑群

調査区の東側において土坑が多数検出された。これらの土坑の分布は主に南北の二か所に集中しているため、ここではそれぞれのまとまりを北側土坑群および南側土坑群と呼称する。

造 構

北側土坑群 (第27図)

SK 002からSK 017までの16基が含まれ、SI 006およびSI 007と重複関係をもつ。これらは、調査時の所見および遺物の検討から、ほとんどの土坑は住居跡よりも新しく構築されたものと思われる。形態的には円形のが多く、なかでもSK 002、SK 003、SK 013の3基はいずれも径が約1.2m、深さが約0.3mで、断面も浅い円筒形で、よく似ている。各土坑の性格等の位置付けは、調査範囲が狭いため明確にできないが、これらのいくつかは掘立柱建物跡の一部を構成する可能性が考えられる。

南側土坑群 (第28図 図版5)

SK 018からSK 041までの24基が含まれ、SI 002を中心に多数の遺構と重複関係をもつ。これらは、北側土坑群と同様にほとんどの土坑の方が新しく構築されたものと思われる。形態的には円形を主体に、やや梢円形を呈するものが混在する。規模はSK 025やSK 031が大きい方で、

径約1.0mから1.2mほどである。この南側土坑群も調査範囲が限られているため、土坑群の一部の調査にとどまり、全貌は定かではないが、第43図のようにいくつかは掘立柱建物跡の一部を構成する可能性が考えられる。

遺 物 (第29・30図 図版11)

1・3はロクロ土師器高台付壺の口縁部と底部の破片で、同一個体と思われる。1の口径は10.8cmを測り、内面にはミガキがなされ黒色処理を施す。

2・31はロクロ土師器小皿で、2は口径が8.0cm、器高が1.85cmを測り、口高指数は23%である。底部は回転糸切りで、底部から内湾して立ち上がる。31は口径が9.0cm、器高が1.5cmを測り、口高指数は17%である。底部からやわらかに内湾して立ち上がる。また、底部に高台と考えられる半円状の粘土がみられるほか、粘土粒が付着している。

4・7はロクロ土師器高台付碗の底部破片である。4は底径が6.2cmを測り、底部外面に稜を持ち大きく内湾して立ち上がる。内面にはミガキがなされ黒色処理を施す。7は底径が4.6cmを測り、底部から内湾して立ち上がる。内外面には黒色処理を施す。

5・6・11・17・28は壺形土器の口縁部破片である。5は口径が8.0cmを測り、口縁部内外面にはヨコナデを施し、胴部内外面にはハケメを施す。6は口径が15.4cmを測り、口縁部内外面にはヨコナデを施す。11は口径が18.4cmを測り、口縁部外面には斜行する沈線を施す。17は口径が17.6cmを測り、口縁部外面にはハケメを施す。28は口径が15.0cmを測り、口縁部内外面にはハケメを施す。

8・9は鉢形土器で底部を欠損する。8は口径が13.4cmを測り、内外面にはナデおよび赤彩を施す。9は口径が15.0cmを測り、口縁部内外面にはヨコナデを施し、体部外面にはヘラケズリを施す。また、体部内面にはナデを施し、内外面には赤彩を施す。

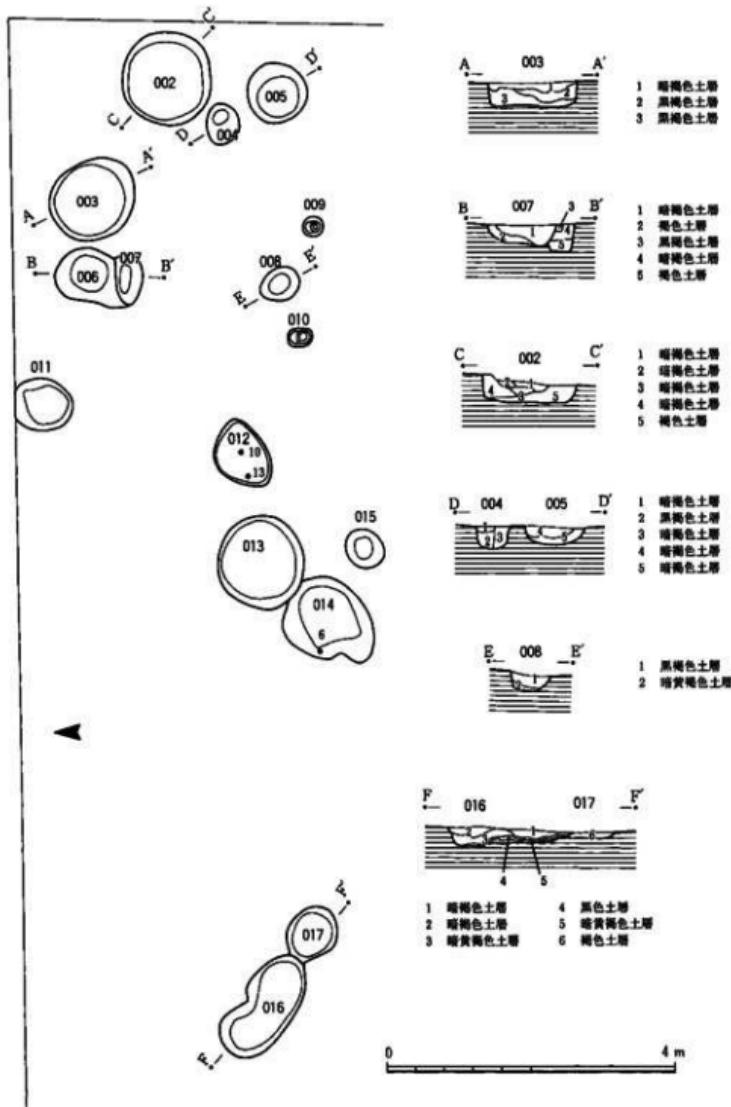
10は小形の浅鉢形土器で、口径が9.15cmを測る。底部外面を含め内外面にはハケメおよび赤彩を施す。

12・15・18・19は須恵器壺形土器である。12は口径が26.1cmを測り、胴部外面には平行タタキ目が残る。15は外面には平行タタキ目、内面には同心円タタキ目が残る。

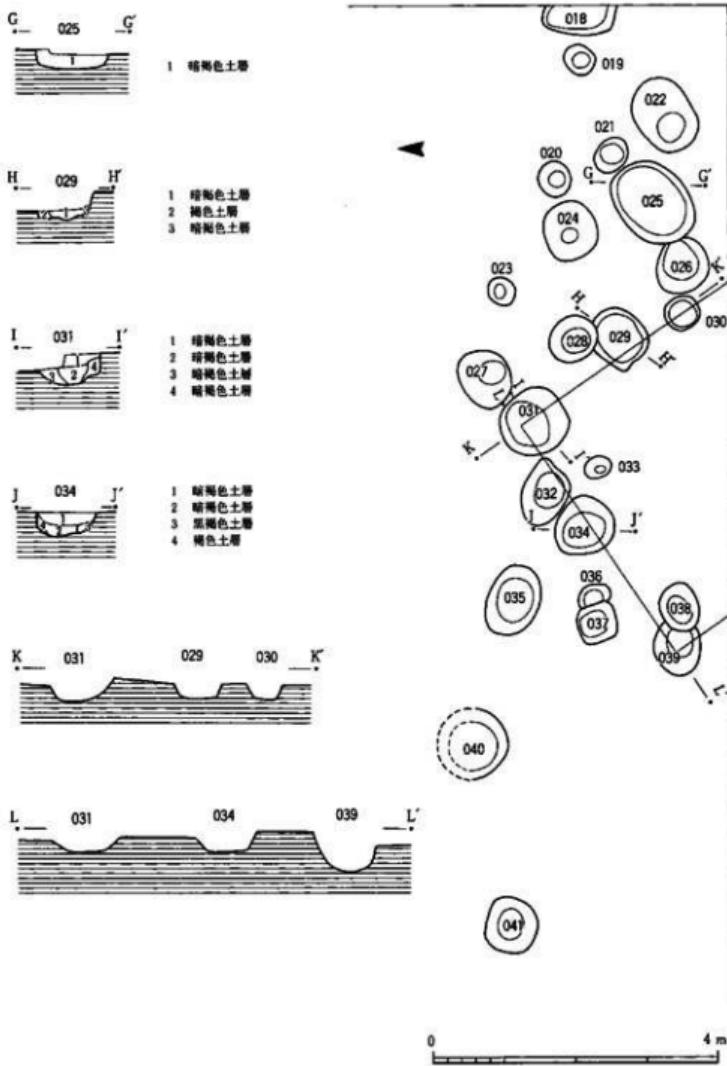
13は灰釉陶器段皿で、口径が14.8cm、器高が2.5cm、底径が7.0cmを測る。色調はやや緑色をおびた灰色を呈し、胎土には砂粒が目立つ。施釉は全体ではなく、口縁部を中心に施され中央部には施されない。高台は稜がやや不明瞭な三日月高台である。

14・20・22はロクロ土師器壺である。14は口径が14.7cm、器高が4.9cm、底径が7.0cmを測る。回転糸切り後ヘラ調整を施す。体部外面下端にはヘラケズリを施し、内面にはヘラミガキを施す。20は底径が7.5cmを測る。22は底径が5.0cmを測り、回転糸切り未調整である。また、体部外面下端にはヘラケズリを施す。

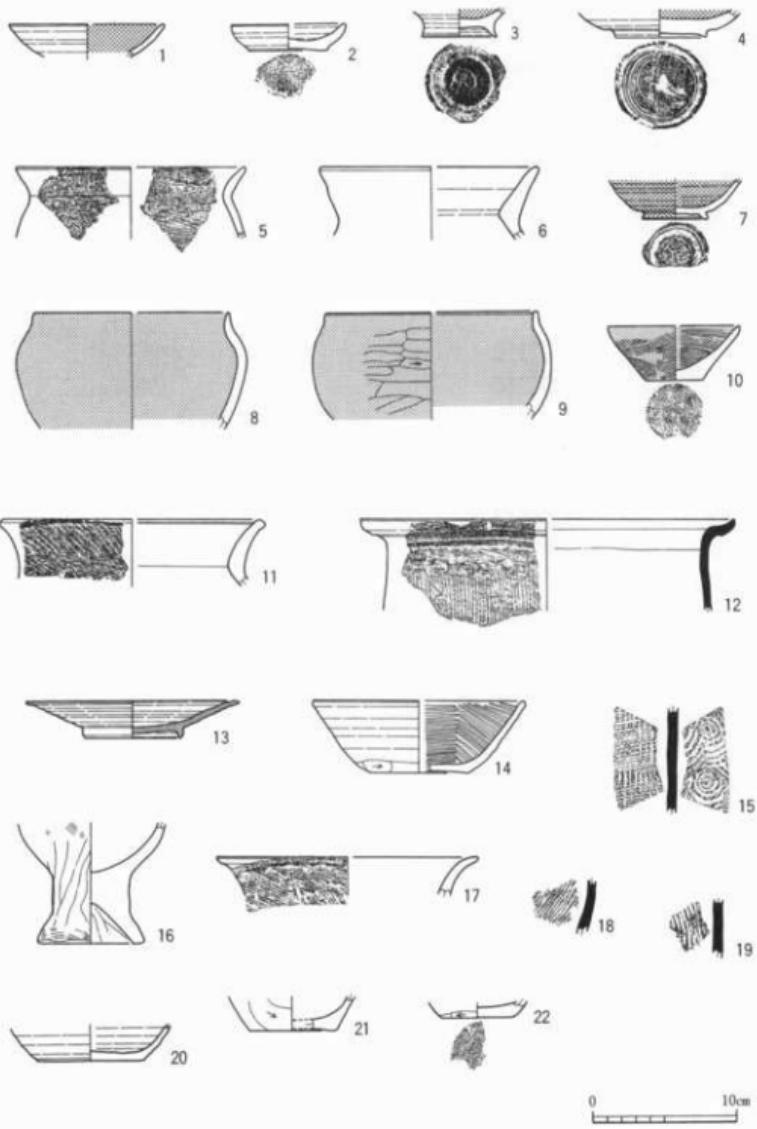
16は高壺形土器の脚部破片で、短く厚い脚部で、内外面にはヘラケズリを施す。



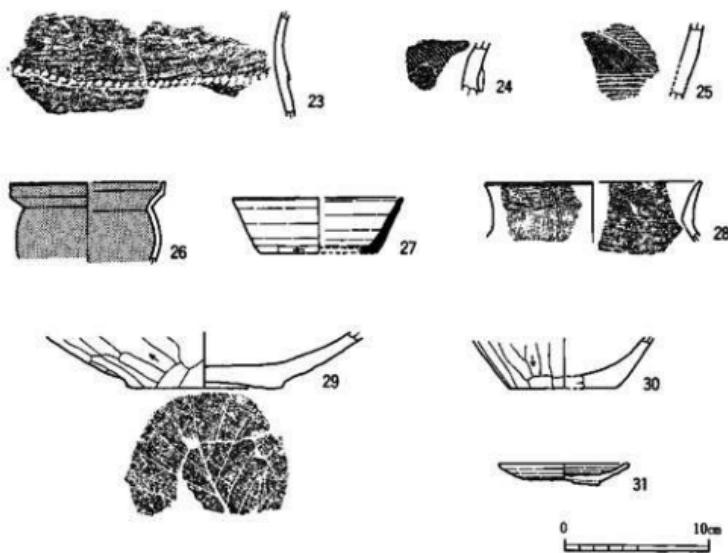
第27図 北側土坑群 (SK 002~SK 017)



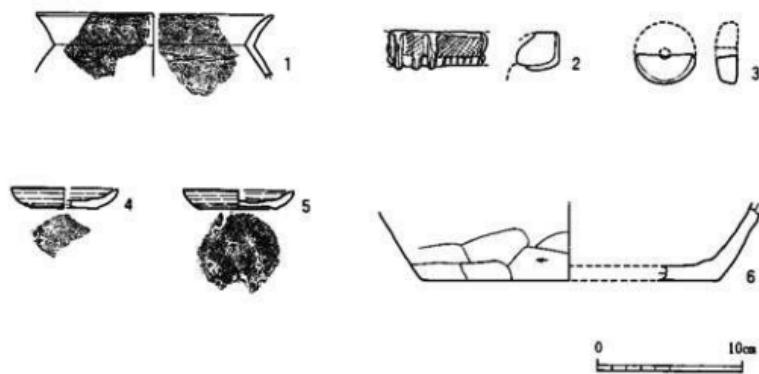
第28図 南側土坑群 (SK 018~SK 041)



第29図 土坑群出土土器(1)



第30図 土坑群出土土器(2)



第31図 グリッド出土土器・土製品

21・29・30は壺形土器の底部破片で、いずれも外面にはヘラケズリを施し、内面にはナデを施す。21は底径が6.1cmを測る。29は底径が10.8cmを測り、底部外面には木葉痕が残る。30は底径が7.5cmを測る。

23は壺形土器の胴部破片で、横に一条の刻目を施す。

24・25は壺形土器の胴部破片で、24は外面には羽状繩紋および円形浮紋を施し、内外面には赤彩を施す。25は外面上部には沈線で区画されたなかにL Rの繩紋を施し、下部には集合沈線を施す。

26は小形の壺形土器で、底部を欠損する。口径は10.8cmを測り、内外面には赤彩を施す。

27は須恵器壺形土器で、口径が11.8cm、器高が3.7cm、底径が8.0cmを測る。体部外面下端にはヘラケズリを施す。

そのほか、砥石と軽石が各1点（第33図5 図版12-5、第34図18 図版12-18）出土しているが後述する。

6 グリッド出土土器・土製品（第31図 図版11）

1は壺形土器の口縁部破片で、口径が16.4cmを測る。口縁部内外面および胴部外面にはハケメを施し、胴部内面にはナデを施す。

2は壺形土器の口縁部破片で、二重口縁である。外面には細かい撚糸紋を施した後棒状浮紋を付す。また、下端には刻目を施す。

3は土製の紡錘車で、ほぼ中央から欠損する。上径が3.65cm、器高が1.3cm、底径が4.2cm、孔径が0.7cmを測り、特に紋様は認められない。

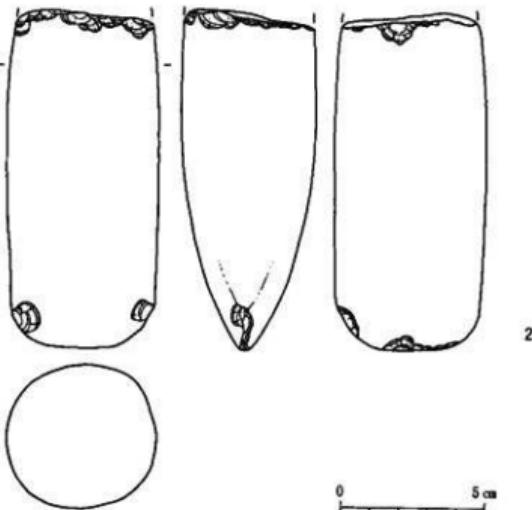
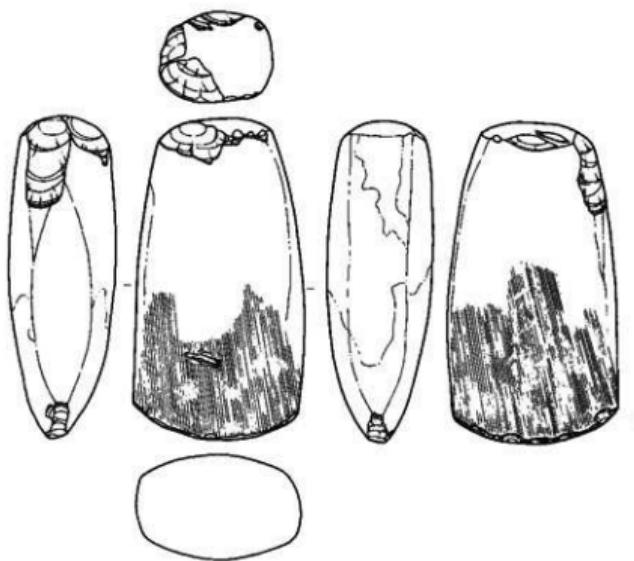
4・5はロクロ土師器小皿で、4は口径が7.4cm、器高が1.35cmを測り、口高指数は18%である。回転糸切り未調整で、底部からやや弱く内湾して立ち上がる。5は口径が7.6cm、器高が1.3cmを測り、口高指数は17%である。回転糸切り未調整で、底部から弱く内湾して立ち上がる。

6は壺形土器の底部破片で、底径が20.6cmを測る。外面にはヘラケズリを施し、内面にはナデを施す。また、胎土には砂粒を多量に含む。

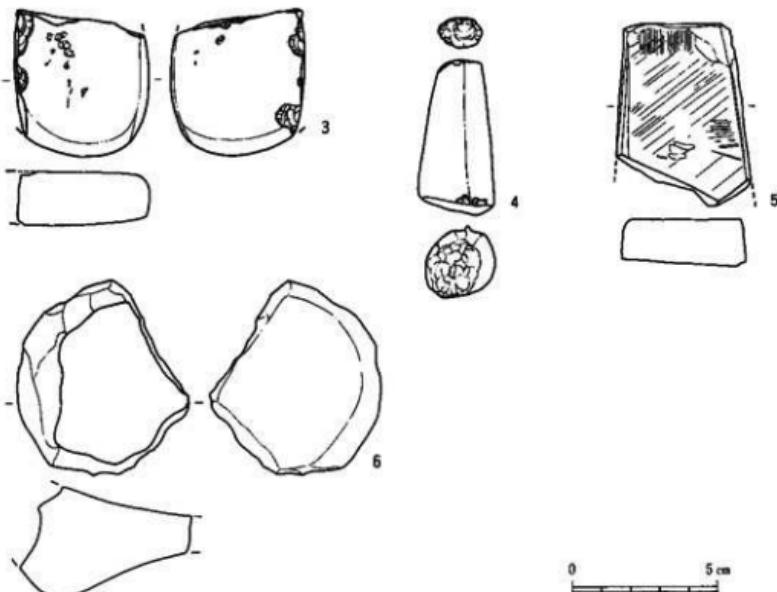
7 石 器（第32・34図 図版12）

石器は軽石を主体に少量出土した。

1・2は磨製石斧である。1はSI008から出土した閃緑岩製の扁平蛤刃石斧である。刃部側約半分の表裏両面に縱方向の研磨痕が残る。なお、形態的には刃部側が少し開く撥形で、刃部の形状は直刃ではなく弧を描く。また、刃部は使用によりかなり潰れて広いところでは厚さが7~8cmを測る。長さ11.0cm、厚さ3.6cm、刃部幅6.0cm、重量429.8g。2はSI003から出土した閃緑岩製の太型蛤刃石斧で、頭部を欠損する。研磨は全体において、形態的には頭部から刃部



第32図 石器(1)



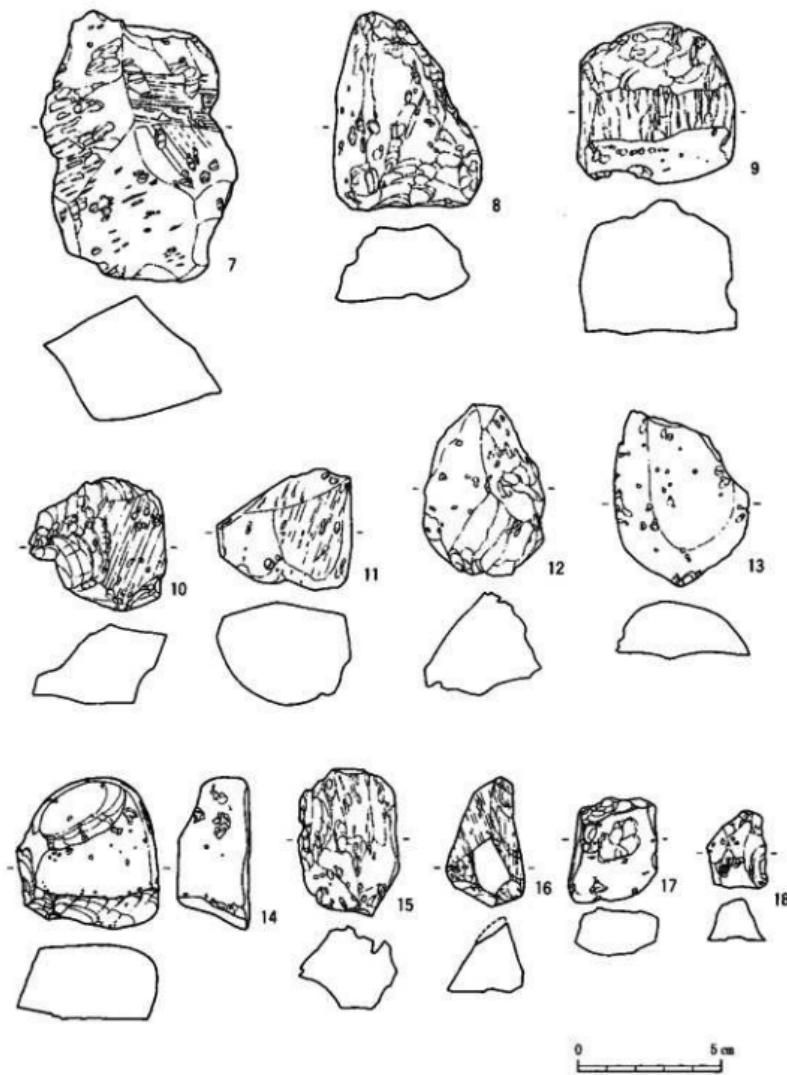
第33図 石器(2)

まで幅がほとんど同じ短冊形で、断面はほぼ円形である。刃部の形状は弧を描くもので、刃部は使用により潰れている。現存長11.5cm、厚さ4.8cm、刃部幅5.4cm、現存重量493.5g。

3・6は磨石で、いずれもSI008から出土した。3は細粒砂岩製で、欠損部分を考慮すると遺存度は約50%ほどである。表裏両面および一側面に研磨痕があり、特に側面のものは顕著である。断面の形状は扁平な方形である。現存長4.8cm、現存幅4.6cm、現存厚1.9cm、現存重量71.2g。6は粗粒の砂岩製で、周囲をぐるりと欠損しており、遺存度は約25%ほどである表裏両面は中央部が磨り減ってかなり薄くなっている、小形の石皿のようである。現存長6.5cm、現存幅6.2cm、現存最大厚3.7cm、現存最小厚1.2cm。現存重量146.6g。

4は敲石で、SD001から出土した。安山岩製で長軸の上下両端に打痕があり、ハンマーストーンとしての役割りを推定することができる。長さ5.5cm、最大幅2.7cm、最大厚2.4cm、重量42.1g。

5は砥石で、SK004から出土した。花崗岩製で、形態はやや撥形の方形であるが、全体としては整った形状である。断面の形状は扁平な方形で、遺存度は約50%ほどである。現存長6.4cm、現存最大幅4.7cm、現存最大厚1.6cm、重量73.5g。



第34図 石器(3)

第1表 石器一覧

番号	器種	石材	法量(cm)			重量(g)	遺構	備考
			長	幅	厚			
1	扁平鉈刃石斧	閃緑岩	11.0	6.0	3.6	429.8	SI 008	
2	大型鉈刃石斧	閃緑岩	11.5	5.4	4.8	493.5	SI 003	頭部欠
3	磨石	砂岩	4.8	4.6	1.9	71.2	SI 008	粗粒
4	磨石	安山岩	5.5	2.7	2.4	42.1	SD 001	
5	砥石	花崗岩	6.4	4.7	1.6	73.5	SK 004	下半部欠
6	磨石	砂岩	6.5	6.2	3.7	146.6	SI 008	粗粒
7	軽石		9.7	7.0	4.5	44.6	SI 002	研磨痕
8	軽石		8.0	5.3	2.7	16.1	SI 009	研磨痕
9	軽石		5.7	5.4	4.7	27.5	SI 003	
10	軽石		4.5	5.2	2.7	9.1	SI 007	研磨痕
11	軽石		3.9	4.7	3.5	14.9	グリッド	研磨痕
12	軽石		5.8	4.0	4.0	22.9	SI 003	
13	軽石		6.1	4.7	2.4	10.2	SI 008	研磨痕
14	軽石		5.2	5.0	2.6	29.5	SI 008	研磨痕
15	軽石		5.3	3.7	3.2	7.7	SD 001	
16	軽石		4.6	2.9	2.3	3.7	SI 005	研磨痕
17	軽石		3.8	3.2	1.7	3.4	SI 008	研磨痕
18	軽石		2.7	2.1	1.4	1.3	SK 008	研磨痕

7から18は軽石である。最大は7で長さ9.7cm、幅7.0cm、厚さ4.5cm、重量44.6gを測り、最小は18で長さ2.7cm、幅2.1cm、厚さ1.4cm、重量1.3gを測る。これらのほとんどには研磨痕が遺存し、研磨痕の認められないものは9・12・15のわずかに3点のみである。また、これらの軽石に残された研磨痕にはいくつかの共通性がみられ、それは大きく三つに分けることができる。一つは窪みのあるもので、7・10・11・16にみることができる。このなかには7にみられるような溝状の窪みをもつものも含めたが、あるいは別種とすべきかもしれない。二つ目は丸みのあるもので、13・14にみることができる。14には剥離痕と思われるものもある。三つ目は平らなもので、8・17・18にみることができる。以上の三つに分けられた研磨痕のありようは個々の軽石の用途を考える場合の一つのアプローチといえるかもしれない。軽石は各地の多くの遺跡から発見され、かなり普遍的な道具であったと思われるが、その用途は漁網用の浮子の他、このように研磨材としての用いられ方が以外と多かったのではないかと考えられる。

III まとめ

今回の調査では面積が少なかったためか、旧石器時代と縄文時代の遺構や遺物はほとんど検出されなかっただけで、ここでは弥生時代から述べることにする。

1 弥生時代

弥生時代の遺構や遺物は少ないが、時期的には中期から後期のものまである。

弥生時代中期

弥生時代中期の遺構としては、方形周溝墓のSX001と環濠のSD001がある。この方形周溝墓については、残りのため多くを述べることができないが、方形周溝墓は前回の調査時に多数検出され、なかでも四隅が切れるタイプが主体的であったことから、今回のものも同様なものと考えられる。また、環濠についても、前回の調査で検出されており、その続きと考えられるが、今回は遺物の出土は少なかった。

弥生時代中期の遺物は、環濠からの出土のみで、壺の口縁部と胴部の破片である。このうち櫛描きの波状紋や平行線紋は、北関東から中部地方に特色のあるものである。

弥生時代後期

弥生時代後期の遺構としては、SI001、SI002、SI010の3軒の竪穴住居跡がある。いずれも後代の遺構と重複していたり、調査区のはずれであったりしてプランの完掘はできなかった。

弥生時代後期の遺物は、他の時期の遺構からも少量ずつ出土したため、遺構数が少ない割りには検出できたものと思われる。弥生時代後期の遺物の特徴は、やはり北関東から中部地方のものと南関東から東海地方のものの両者がみられることである。北関東から中部地方的なものとしては、SI010出土のほとんど二軒屋式そのものといってよい土器が代表的である。また南関東から東海地方的なものとしては、SI001出土の口縁内側に羽状の刺突をもつ壺やグリッド出土の棒状浮紋をもつ壺などがあげられる。

2 古墳時代

今回の調査では、古墳時代の遺構と遺物が主体をなす。

古墳時代前期

古墳時代前期の遺構としては、SI003、SI004、SI005の3軒の竪穴住居跡があるが、このうちの2軒についてはほとんどが調査区外のため未調査である。

古墳時代前期の遺物もあまり多くはなく、SI003出土の壺、甕、器台等があげられるぐらいである。

弥生時代 中期	
弥生時代 後期	
古墳時代 前期	
古墳時代 中期	
古墳時代 後期	
奈良・平安 時代	

第35図 出土土器集成図

古墳時代中期

古墳時代中期の遺構としては、SI007、SI009の2軒の竪穴住居跡とSI008の竪穴住居跡を兼ねた石製模造品の工房跡がある。滑石製模造品の製作跡であるが、製品は一点も出土しなかった。しかし、今後は遺跡内の他の地点あるいは付近の遺跡から工房跡の検出される可能性が高まることは確かであり、遺跡を分析する視点の増加にもつながるものである。

古墳時代中期の遺物は、今回一番多く出土した。主なものとしては、SI007出土の壺、壺、炉器台、鳥帽子形支脚、SI008出土の壺、壺、壺、SI009出土の壺、壺、高壺等がある。

古墳時代後期

古墳時代後期の遺構としては、SI006の竪穴住居跡1軒のみであり、しかもその多くは調査区外にあるため未調査である。

古墳時代後期の遺物もわずかで、SI006出土の壺、SI008出土の須恵器壺蓋、土坑群出土の高壺ぐらいである。

3 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構としては、SI011および土坑群があるが、調査の範囲が狭いため竪穴住居跡もごく一部の調査にとどまるとともに、土坑群の明確な位置づけも困難な状況である。

奈良・平安時代の遺物も多くはないが、少量ながらまとまっている。特にロクロ土師器の一群は、灰釉陶器の出土とともに古代末期を特徴づけるものである。灰釉陶器はSK012土坑からの出土であるが、その特徴を述べれば、段がやや崩れた段皿で、高台は積がやや不明瞭な三日月高台で、施釉は口縁部を中心としたもので漬けかけと思われる。色調はやや緑色をおびた灰色で、胎土には砂粒が目立つ。このような特徴をもった灰釉陶器の出自を求めれば、猪投窯の折戸53号窯式の第3段階から第4段階のもので、西暦1,000年前後の年代が推定される（齊藤1982、田口 1982、前川 1984）。

4 石製模造品について

SI008から多量の滑石製模造品が出土したことは前に述べたが、ここではもう少し詳しく検討してみたい。なお、出土した石製模造品の总数は2,551点で、その内訳を示せば第2表のようになる。種別は、勾玉の未製品が2点の他は白玉の未製品とほとんどは白玉の製作に関わる各段階の剥片類である。

種 別

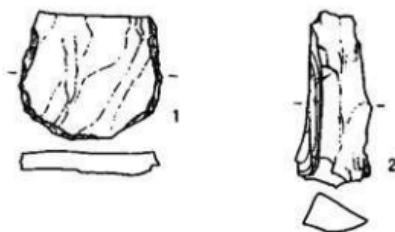
ここで未研磨プランク（第36図1、2）とよぶのは、研磨がまだ施されない段階のもので、原石に少し加工を加えたものである。研磨プランク（第36図4、5）は、表裏両面をほぼ平行になるように研磨して断面の形状を板状にするとともに、周囲の側面に剥離を加えて全体の形

第2表 石製模造品一覧

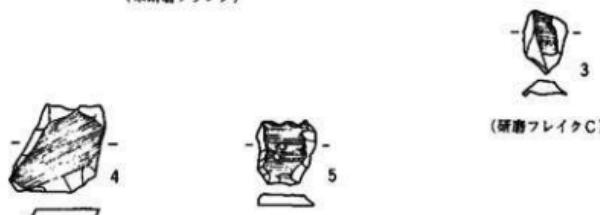
種 別	数 量	法 量 平 均 (cm)				重 量 (g)	
		長	幅	径	厚	全 体	平 均
勾玉	多角形未製品	1	4.37	2.30	—	0.42	7.54
	仕上げ調整未製品	1	4.22	2.45	—	0.50	8.33
白玉	未研磨ブランク	3	4.50	2.39	—	0.80	30.60
	フレイクA(大)	7	1.98	1.30	—	0.52	9.77
	フレイクB(チップ含む)	1,772	—	—	—	132.62	0.07
	研磨ブランク	4	1.80	1.36	—	0.30	5.11
	研磨フレイクA(両面)	197	—	—	—	17.81	0.09
	研磨フレイクB(片面)	366	—	—	—	30.19	0.08
	研磨フレイクC(大)	5	1.94	1.16	—	0.44	6.63
	多角形未製品	11	—	—	0.71	0.31	2.30
	穿孔未製品A(穿孔未了)	167	—	—	—	12.62	0.08
	穿孔未製品B(穿孔了)	12	—	—	0.66	0.27	1.46
合 計		2,551	—	—	—	266.03	—

第3表 白玉法量一覧

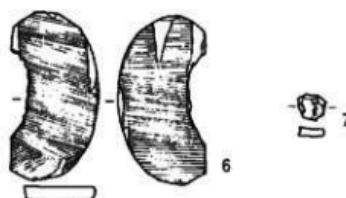
遺 跡 名	数 量	法 量 平 均 (cm)		重 量 (g)	
		径	厚	全 体	平 均
清和乙遺跡	152	0.43	0.25	—	—
綱原遺跡	318	0.40	0.25	—	—
東寺山石神遺跡	1,854	0.39	0.25	—	—
祝崎古墳群	240	0.3~0.5	0.1~0.4	—	—
石塚遺跡(公津原Loc. 20)	214	—	—	15.21	0.07
道庭遺跡	多角形未製品	11	0.71	0.31	2.30
	仕上げ調整未製品	5	0.73	0.32	1.05



(未研磨ブランク)



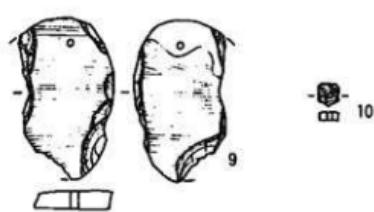
(研磨ブランク)



(多角形未製品)



(穿孔未製品B)



(仕上げ調整未製品)

第36図 石製模造品(2)

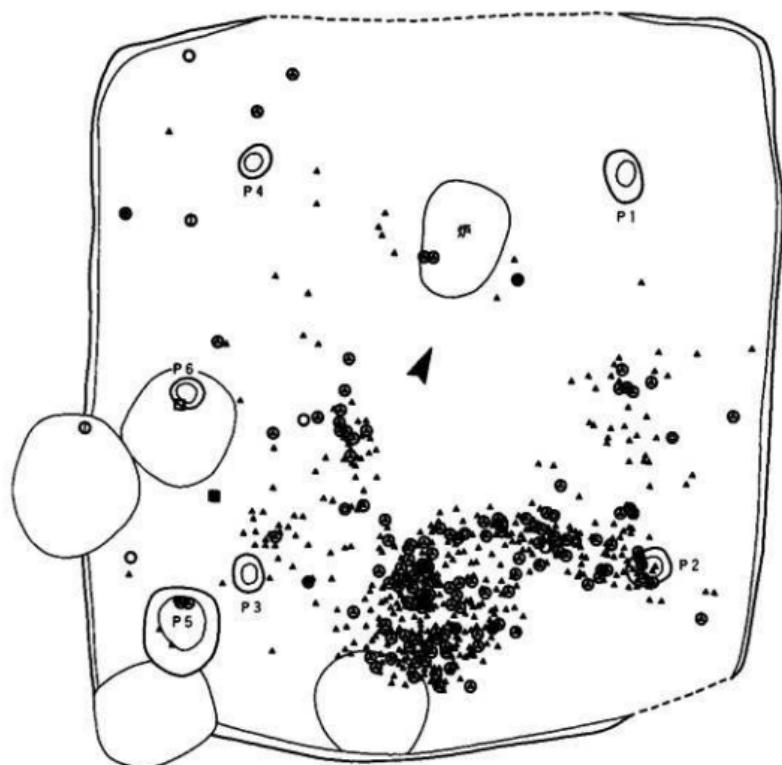
状をやや方形にしたものである。フレイクは、原石から未研磨プランクを作出する過程で生じるとともに、未研磨プランクから研磨プランクを作出する過程でも生じる。また、ごく小さなフレイクはさまざまな段階において生じる可能性のあることはいうまでもない。このフレイクのうちフレイクAとしたのは、フレイクのなかで特に大きいものをさし、未研磨プランクとしたものに比べサイズに格差があるものの未研磨プランクとしての可能性のあるものである。多角形未製品（第36図6、7）は、研磨プランクに側面の剥離と表裏両面の研磨を施して、断面を薄くするとともに全体の形状を多角形にしたもので、穿孔直前の段階のものと考えられる。穿孔未製品は、多角形未製品に穿孔を施したものであるが、このうち穿孔未製品Aとしたものは、穿孔途中で破損したものおよび穿孔が途中で停止してしまったものである。いわば、穿孔未製品Aは穿孔未了品とも言い換えることができる。穿孔未製品B（第36図8）としたものは、穿孔は終了しているがあまりに偏っていたり表裏両面が平行ではなく三角形に近いなど、穿孔段階あるいは次の仕上げ調整の段階における破損品と思われる。仕上げ調整未製品（第36図9、10）は勾玉や白玉の製品になる直前の段階のものあるいは仕上げ調整の段階の破損品と考えられる。研磨フレイクは、研磨プランクの調整剥離から製品を作出するまでの各段階において生じるものである。ここで研磨フレイクAとしたものは、表裏両面に研磨痕をもつものである。研磨フレイクBとしたものは、片面のみに研磨痕をもつものである。研磨フレイクC（第36図3）としたものは、研磨フレイクのなかで特に大きなもので、研磨プランクのある段階のもの可能性がある。

分 布

石製模造品は、3点を除きすべてSI008からの出土である。その分布についてはSI008のところで述べたように第18図のごとく南側に集中しており、細かくみるとさらに1か所の大きな集中部とそのまわりの4か所の小さな集中部としてとらえられる。このなかからフレイクを除いて図示したのが、第37図である。また、これには石器類も加えたが、大勢としては全体の場合とあまり変わりがみられない。しかし、若干の違いを指摘すれば、勾玉の未製品や未研磨プランクおよび研磨プランクのほとんどが西側から出土しており、しかも集中部から外れて存在していることである。このことは、この西側のスペースにおいて勾玉の製作を行ったか、あるいは白玉の初期の段階の製作を行ったことが考えられるとともに、このスペースにこれらのものが保管されていたとも推定される。また、穿孔未製品についてもそれを多く含む集中部とそうでない集中部があり、行われた作業に若干の違いを想定することもできる。

製作工程

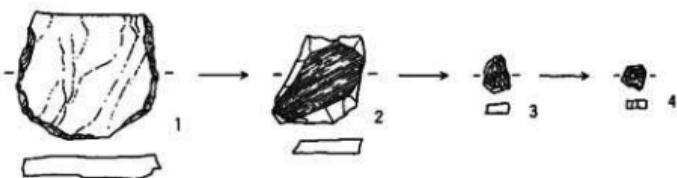
今回は一堅穴住居跡における工房跡から出土したという限られたものであり、これが必ずしも本遺跡で行われた石製模造品の製作を代表しているとは思われないが、今回出土した資料の範囲で、その製作工程を復元することにしたい。なお、資料の多い白玉について行い、勾玉に



- | | |
|------------|----------|
| ① 勾玉 | ■ 扁平蛤刃石斧 |
| □ 未研磨ブランク | ● 磨石 |
| ○ 研磨ブランク | ▲ 軽石 |
| △ 研磨フレイク | |
| ● 多角形未製品 | |
| ● 穿孔未製品 | |
| ● 仕上げ調整未製品 | |

0 2 m

第37図 SI008石製模造品分布図(2)



第38図 白玉製作工程

についてはほとんどが白玉に準ずるものと思われる。まず、原石あるいは未研磨ブランク（第38図1）として持ち込まれ、それに剥離を加えるとともに表裏両面に研磨を施して板状でやや方形の研磨ブランク（第38図2）とする。さらにこれに剥離と研磨を施して多角形未製品（第38図3）を作出する。これに穿孔を施し、研磨をして完成させるものと推定される。第38図4はこの段階の未製品あるいは破損品と思われる。また、剥離については、打ち欠くばかりではなく、擦り切りが行われていると思われるもの、加熱による折断が行われていると思われる資料もみられる。このことから未研磨ブランクおよび研磨ブランクの段階でいくつかに分割することが行われていると考えられる。以上のような製作工程は、寺村氏が管玉の製作において八代・大和田技法と呼称するものにはほぼ相当するものといえ（寺村 1974他）、未研磨ブランク、研磨ブランクはそれぞれ氏のいう荒割未製品、形割未製品に近いものと思われる。

製 品

出土した石製模造品は、すべて未製品、破損品、剥片等で、製品は一つも出土しなかった。そこで、資料数の多い白玉について、つくれられて運び出されたと考えられる製品の大きさ、あるいはその点数等について少し検討してみたい。まず、大きさについては、第3表のように3遺跡がほぼ等しいことから径が約0.4cm、厚さが約0.25cmと推定される。重さは、石塚遺跡の0.07gのみのため、本遺跡の未製品から割り出すと0.05gとなり石塚遺跡とほぼ等しいといえそうである。したがって、目的とする白玉は、径約0.4cm、厚さ約0.25cm、重さ約0.05gのものであったと推定される。また、これを未研磨ブランクおよび研磨ブランクの平均重量と比較すると、その差はそれぞれ10.15g、1.23gとなり、それぞれから1点ずつ製品がつくられたと仮定した場合には、この差の分だけフレイクまたは研磨フレイクとして遺棄されることになる。ここで、フレイクの総重量と研磨フレイクの総重量をみるとそれぞれ142.39gと54.63gとなり、未研磨ブランクおよび研磨ブランク各1点から製品各1点が作られたと仮定すると、さきほどの10.15gと1.23gからそれぞれ14点と44点しかつくられなかったことになり、穿孔未製品Aなどの数字とは矛盾が生じることになる。穿孔未製品Aが約1/2に割れていると考えれば未製品だけでも

は111点となり、これに製品を加えれば全部で150～200点ほどになるものと推定される。このことから、未研磨プランクおよび研磨プランク各1点からは複数の製品ないしは未製品がつくり出されたものと考えられ、これは製作工程における分割や折断のあり方とも符合するものである。

引用・参考文献

- 天野 努他 「公津原Ⅱ」財団法人千葉県文化財センター 1981年
- 太田文雄 「清和乙遺跡」「大栄栗源干潟埋蔵文化財調査報告書」財団法人千葉県文化財センター 1990年
- 岡崎文喜・佐藤武雄・金刺伸吾 「夏見台（第2次）—古墳時代の集落址の調査—」船橋市教育委員会 1976年
- 小沢 洋 「祝崎古墳群・戸崎城山遺跡発掘調査報告書」財団法人君津郡市文化財センター 1984年
- 小沢 洋 「境遺跡」財団法人君津郡市文化財センター 1985年
- 加藤正信・小林清隆・山口典子 「生産遺跡の研究 2—玉一」財団法人千葉県文化財センター 研究紀要13 1992年 *
- 熊野正也 「和泉期の社会と石製模造品について」齊藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編「考古学叢考 中巻」吉川弘文館 1988年
- 栗田則久 「網原遺跡」「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI（佐原地区3）」財団法人千葉県文化財センター 1991年
- 群馬県考古学談話会・北武藏古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所 「第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器」 1986年
- 齊藤孝正 「猿投窯における灰釉陶の展開」考古学ジャーナル211 1982年
- 並生 衛 「房縁における中世的土器様相の成立過程—房縁における古代末期から中世初期の土器様相—」史館21 1989年
- 白石太一郎 「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」国立歴史民俗博物館研究報告7 1985年
- 菅谷通保・小久賀隆史 「千葉県茂原市国府間遺跡群」財団法人長生郡市文化財センター 1993年
- 関川尚功他 「櫻原市曾我遺跡発掘調査概報Ⅰ」「奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1982年度」 奈良県立櫻原考古学研究所 1983年
- 関川尚功他 「櫻原市曾我遺跡発掘調査概報Ⅱ」「奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1983年度」 奈良県立櫻原考古学研究所 1984年

- 高橋一夫 「石製模造品出土の住居址とその性格」考古学研究18-3 1971年
- 田口昭二 「美濃窯の灰釉陶器と綠釉陶器」考古学ジャーナル 211 1982年
- 種田齊吾 「千葉市上ノ台遺跡—国鉄幕張電車基地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—」
千葉県都市公社 1973年
- 玉口時雄他 「公津原 成田ニュータウン内遺跡の考古学的調査」千葉県企業庁 1975年
- 寺村光晴 「下総国の玉作遺跡」雄山閣 1974年
- 寺村光晴 「古代玉作形成史の研究」吉川弘文館 1980年
- 沼沢 豊 「東寺山石神遺跡」財団法人千葉県文化財センター 1977年
- 平岡和夫 「千葉県九十九里地域の古墳研究」山武考古学研究所 1989年
- 前川 要 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相—瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして—」瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ 1984年
- 山本哲也 「西上総における古墳時代中期の玉作—文脇遺跡の例を中心として—」財団法人君津都市文化財センター研究紀要V 1991年
- 八幡一郎他 「外原—古墳時代集落址・滑石工房址の発掘調査—」船橋市教育委員会 1972年

お わ り に

道庭遺跡は、九十九里平野から遠くは太平洋を望む眺望の良好な台地上に位置し、周囲を海水や河川に浸食されて独立丘陵状をなす。このように豊かな水場に囲まれたほどよい広さの台地上に立地するためか、旧石器時代よりほぼ連続として人々の生活が営まれている。特に弥生時代の中頃からはいわばこの地域の拠点的な集落を形成し、このような状況は平安時代まで続いた、ほぼ一千年という長期におよぶのである。このことは、本遺跡がこの地域の歴史の動態を明らかにするうえで欠かすことのできないものであることを意味する。今回の調査は、この遺跡にとってはごくわずかな面積（約1/500）でしかなく、ほんの一端を垣間見たに過ぎないものである。調査範囲内で完掘できた遺構も少なく、言い尽せることははなはだ乏しかったが、弥生時代から奈良・平安時代まで各時代の遺構や遺物が検出され、やはり大遺跡であると思われるものがある。弥生時代における北関東の二軒屋式土器等の出土は、前回の調査でもいわれているとおり、この地域が北関東と南関東両地域の土器文化の影響のもとにあることを追認するものであり、しかもどちらかといえば北関東の影響力の強さをうかがわせるものといえる。古墳時代では石製模造品工房跡の検出が新たな知見であり、今後の調査において他地点から検出される可能性が強まるとともに、その供給先としては本遺跡にある道庭古墳群が最有力であり、そこからの出土遺物について詳細な検討が必要とされる。奈良・平安時代においては灰釉陶器等古代末期の土器群の出土があり、この時期の遺構群の解明も今後の課題である。これらの調査成果は、今後のこの大遺跡の解明に興味深い検討材料を提供したものと思われる。さらにいまでは弥生時代以降の遺構や遺物が注目され、旧石器時代や縄文時代についてはどちらかといえば影が薄かったが、今後はこれらの時代についても十分なる探索が望まれる。なぜならこれらの時代においても決して住みにくい土地であったとは考えられず、かえって弥生時代以降と同様に大変住みよい環境にあったものと思われてならないからである。

写 真 図 版



道と灌漑と開拓の航空写真



調査区近景



調査区全景



調査区東側

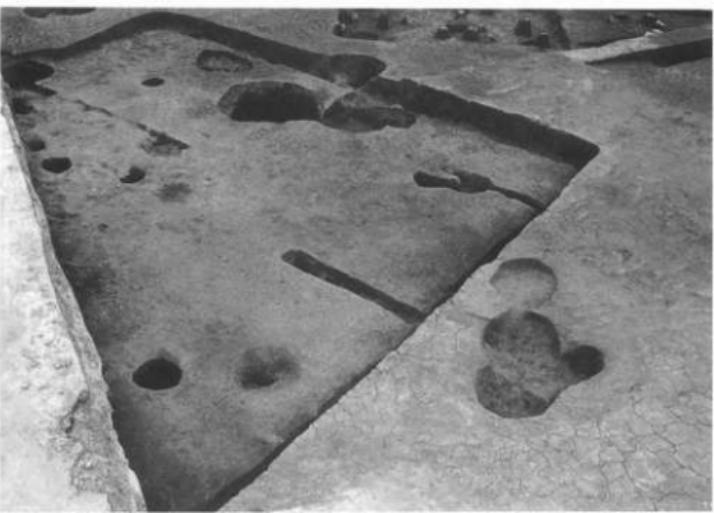
SI003



SI006



SI007





SI008
遺物出土状況(1)



SI008
遺物出土状況(2)



SI008
遺物出土状況(3)



SI009



M001



南側土坑群



14



5



17



15



18



19



1



4



2



5



3



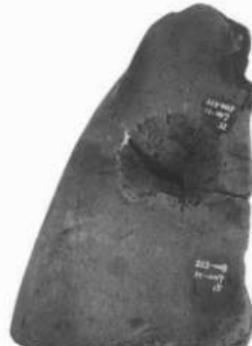
4



19



18



18



15



16



25



28



32



1



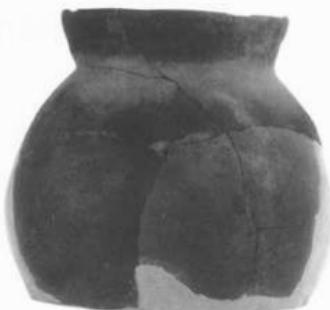
33



2



4



8



9



16



7



3



8

S1008・S1009出土土器(1)



5



6



9



10



11



14



2



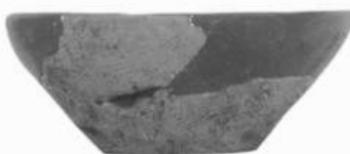
1



14



13



10



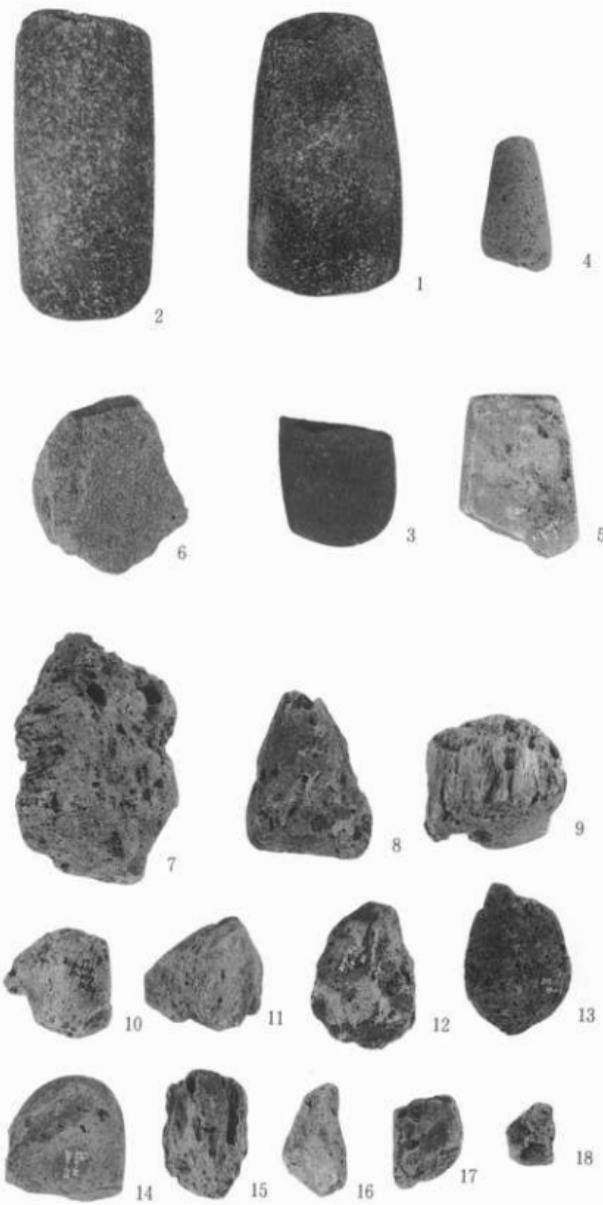
31

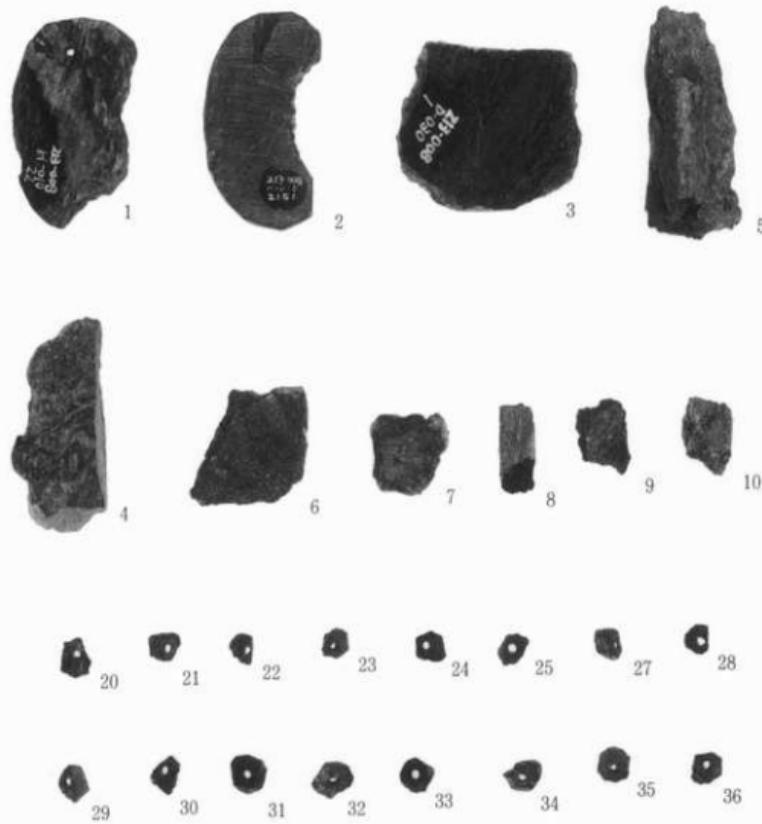


14



5





石製模造品

報告書抄録

ふりがな	とうがねしどうにわいせき						
書名	東金市道庭遺跡						
原書名	農業大学校バイテク棟建設に伴う埋蔵文化財調査報告書						
巻次							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第248集						
編著者名	川島利道						
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター						
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地 2 TEL 043-422-8811						
発行年月日	1994年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
道庭	千葉県東金市家之子字東大宮台	12213 008	35度 35分 5秒	140度 23分 3秒	19920701~ 19920831	480m ²	農業大学校 舎建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
道庭	集落跡	弥生	堅穴住居	3軒	弥生土器、紡錘車 大型蛤刃石斧 土師器、須恵器 土師器、須恵器 灰釉陶器		
		古墳	環濠	1条			
		奈良・平安	堅穴住居 土坑	6軒 1軒 41基			
	墓	弥生	方形周溝墓	1基			
	生産遺跡	古墳	石製模造品工房跡	1軒	石製模造品、土師器 磨石、軽石	勾玉、白玉の未 製品をはじめ滑 石の破片が多量 に出土	

千葉県文化財センター調査報告 第248集

とうがねし どうにわいせき
東金市道庭遺跡

—農業大学校バイテク棟建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成6年3月24日 印刷

平成6年3月31日 発行

発行 千葉県農林部
千葉市市場町1-1 ☎043-223-2906

編集 財團法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2 ☎043-422-8811

印刷 有限会社 ミリオン印刷
千葉市中央区南町3-4-2 ☎043-266-7511
